
ANOTHER world

穀羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A N O T H E R w o r l d

【Nコード】

N 4 2 2 2 F

【作者名】

毅羅

【あらすじ】

処女作です。学園エヴァから本編に準ずる形になります。色々仲間違いや下手くそな文章になると思いますがひろーい心で読んでくれると幸いです。

第壱話 出会い、そして始まり（前書き）

感想等で誹謗・中傷はやめてください。

第壱話 出会い、そして始まり

「シンジ、起きなさい！」

朝の心地良い日差しが入り込む部屋に大きな罵声がとぶ。

「ふああ・・・おはよう、アスカ」

「やっと起きたわね。全く、どうしてこうも朝は弱いのかしら」

「しょうがないだろ、布団で暖かいんだから」

僕の名前は碓シンジ。第参東京市立第壱中学校に通う2年生だ。

「私は先に玄関にいるから早く着替えと朝ご飯すましてね」

彼女は惣流・アスカ・ラングレー。名前からもわかるようにクォーターである。僕の幼なじみで気づいたらこうして毎日起こしてくれるようになった。僕はアスカを部屋から追い出すとすぐさま制服に着替える。そうして部屋のドアを開け、リビングに行くと父と母がいた。

父は新聞を読んでいて、母は台所で何か色々忙しそうにやっていた。僕は

「おはよう」と言うパンをかじった。

父と母は同時に

「おはよう」と言う。

父の名前は碓ゲンドウだ。めがねをかけて端から見たらチョー怖いおっさんにしか見えない。

母の名前は碓ユイ。自他に認める美人だ。よくこんな人が父を選んだと思う。

僕は素早く朝ご飯を胃の中に収めると鞆を持って玄関に行った。

「行つてきまーす!!」

僕とアスカの声がハモる。毎朝こんなことをやってるからもう気にしてない。最初は恥ずかしかったけどね。

母は

「気をつけるのよー!」と言った後に父をせかす。

「もう、早く支度してください。会議に遅れますよ!」

父と母は「ゼーレ」という会社に勤めている。なにをしてるかわからないけど……。

「わかってるよ、ユイ」

と言うとゆっくりと立ち上がり、支度をし始めた。マイペースなところがシンジに似たのかもしれない。

僕とアスカは通学路をほぼ全力で駆け抜けていた。毎朝これをやっている。もっと早く起きれば余裕で学校に着くんだけどね、布団の暖かさに負けちゃうんだよね。

目の前に丁字路が見えた。もう少しで学校だ。いつの間にか僕のスピードは上がっていた。そして丁字路を抜けようとするときに、左から、おそらく同じ立場だろうと予想できる女の子が飛び出してきた。

ドカーン!!!!

僕は止めきれずにその女の子と凄まじい勢いで衝突してしまった。アスカは

「ハアアア・・・」といった様子でかおを手で押さえ、首を横に振っ

ていた。

「いててて・・・」

僕は顔を上げ、ぶつかった女の子を探した。と、目の前に自分の学校の制服が目飛び込む。さらに上を見ると赤い瞳と目があった。青い髪をショートにまとめている。レベル的にはアスカと同じくらい可愛い。

僕がそんなことをしていると女の子は立ち上がって走り出した。

「ごめんね。マジで急いでたんだ。ホント、ごめんねー」

横ではアスカが怪訝そうな顔でその女の子を見ていた。

僕はアスカに半ば強引に引っ張られると、再び走り出した。

あの女の子、見たことなかったな・・・

そんなことを思っていると学校が目の前に現れた。僕とアスカはスピードを落とさないまま、中に入っていた・・・。

次回予告

謎の女の子に出会ったシンジ。その女の子がもたらすものは混乱か、友情か。

そして「ゼーレ」でついに実行されるE計画。ゲンドウとユイの仕事とは果たして？

次回、ANOTHER world 第弐話 召喚される神々。
この次も、サービス、サービスうう！！

第貳話 召喚された神々（前書き）

誹謗、中傷はやめてください。

第貳話 召喚された神々

結局、僕とアスカは謎の女の子との遭遇でギリギリで教室に滑り込んだ。

「ギリギリやなあ〜」

「新記録達成だと思ったんだけどなあ」

教室に入るなり、僕の友達の人2人が話しかけてきた。

関西弁風に喋るのは鈴原トウジ。スポーツ系の子で いつもジャージを掃いている。

めがねをかけたもう一人の子は相田ケンスケ。戦争のこととか、武器にすごく詳しい。アスカから言わせてみれば、ただのオタクらしいが……。

僕はアスカと別れると、トウジとケンスケに今日あった女の子のことを話した。

「それって今日の転校生じゃないのかな？」僕は

「はっ？」って思わず行ってしまった。

「転校生なんて聞いてないよ？」

すると、トウジとケンスケはニコニコと笑いながら言った。

「そらあ、彼女がおったら転校生にも興味ないわなあ」

「そんなこと……」

言い掛けたところにいきなり抱きついてきた人がいた。

「シンジく、呼んだ？」

「ああ、マナか。おはよう」

この子は霧島マナだ。僕の彼女。髪は紅葉のいろみたいできれいでとてもかわいい。もうアスカなんか目じゃないんだ。

「私無しで女の子の話してたでしょ？。いいの、そんなことして？」

「マナだって男の子の話してたじゃないか」

「あらら、シンジもしかして嫉妬？。可愛いんだから！」

「からかうなよ！」

マナは

「キャハハ！」と笑うと僕に謝ってきた。もう、人をからかうの好きなんだから。まあ、そういう子供っぽいところがまたかわいいんだけどね。そうしているとチャイムが鳴ったと同時に先生が入ってきた。

「おはよう、諸君」

先生の名前は葛城ミサトと言う。本人曰く、永遠の二十歳であり、酒はそれを助ける葉らしい。僕はそうは思わないけどね。

「喜べ、男子いー！今日は転校生を紹介する！」

「ウオオイ」という歓声のもと、先生の背中から女の子が出てきた。

「綾波レイです。よろしく!」

僕は

「あっ!」と思わず叫んでしまった。

「あっ! あんた、さっきのパンツ覗き魔!」

「なあに、シンジに変なこといわないでよ!」

マナがすかさず反撃する。レイも負けじと言う。

「なあに、あんたすぐその子かばっちゃってさ、デキてるの、あんたら!」

僕はなんかマナがバカにされてるような気がして立ち上がって言った。

「「そう(だ) (わよ) !」」

僕とマナのハモった声が教室中に響く。レイはまさかの回答に哑然とさている。クラスの大部分も驚いた顔をしている。無理もない。今までは仲のいい友達と言ってきたし、アスカやトウジ、ケンスケぐらいしか教えてなかった。

「なに、あんた達付き合ってたの!?」

もちろん先生も例外ではない。先生は

「まさかとは思ってたけどね」と言っているに座った。

クラスに陰悪な空気が流れる。それを破ったのはアスカだった。

「あんたら鈍いわね。そんなの見てたら一発じゃないの。先生、転校生、座らせてあげたら？」

先生は

「そーだったわね」と言っただけで席を教えた。僕の左隣だった。

「よろしくね」とレイは言うのと、席に座った。

そうして一段落つくと、急に白衣を着た先生がきた。このクラスの副担任の赤城リツコだ。

そうして、そんなこんなでLHRを終えると授業に突入。授業はたまらなく退屈である。そうして1日を終えると僕はマナと一緒に帰った。帰り道の途中でいつもよっている場所がある。「みちのくの店」っていう場所。甘いものがたくさんあって、そういうのが大好きなマナのために見つけた店だ。

いつも通りに僕は団子と抹茶、マナは大福と同じく抹茶を頼み、いすに座った。

「珍しいのね、そんなに今日のこと、気に入らないの？」

「あの子のちょっとマナをバカにした態度が気に入らなかったただけだよ」

そう言うのと、マナはうれしそうな顔をする。

「へえ、そんなに私のこと大事にしてくれるんだ。嬉しいな」

「当たり前だろ」

そうして僕は和菓子を食べ終わるとマナを家まで送り、家に帰った。

「ただいま」

僕が家にはいるとすごいいい匂いがした。母が珍しく料理に手を入れてるのが分かった。そのまま靴を脱いでリビングに行くとき驚愕した。

♪ジャジャーン♪

効果音がつくくらい素晴らしい料理がテーブルに並ぶ。

「シンちゃん、今日から新しい家族が増えるわよ!」

母は嬉しそうに言い、奥に行った。父もいすに座っていた。この時間にいるなんて珍しい。やはり本当の事なんだろう。

「シンちゃん、この子が新しい家族よ」

そうして母の影から出てきたのは今日転校してきた綾波レイだった。綾波は少し恥ずかしそうな顔をしながら

「よろしくね」と言った。

「父さん、母さん、どうして綾波が家に住むようになったの?」

「綾波さんのご両親とは私達知り合いでね、でもセカンドインパクトの時に亡くなってしまったの。だから私達が引き取る事になった。仲良くしてあげてね」

母はそう言うとき家族全員をテーブルにつかせる。

「もうレイちゃんと呼んでいいわよね。今日はレイちゃんの歓迎パ

ーティーよ！みんなたくさん食べてね」

そう言うも母はそそくさと料理を盛りつけ始めた。僕は

「まあ、いいか」と思うとは食べ始めた。後になってアスカやマナ、トウジやケンスケ、それに委員長の洞口ヒカリもやってきて、挙げ句の果てにはミサト先生やリツコ先生もやって来た。もうパーティーどころか宴会騒ぎである。

「綾波さんてさ、前はどこにすんでたの？」

マナとアスカが綾波に聞く。ケンスケとトウジも興味を示し、耳を傾ける。

「私はね、前は北海道に住んでたんだ」

綾波は懐かしそうに話す。

「友達はどうない奴なんや？」

トウジが聞いた。綾波は

「うーん」と言うも、悩み抜いた挙げ句、

「親しい友達が少しいたかな？」と言った。

「容姿はカッコいいってよりもきれいって感じで、スポーツ万能で頭もいい子がいたわ。少し変わってたけどね」

話を聞いた四人は

「へえー」と行った感じで再び食事に戻った。どんちゃん騒ぎのなか、時はその場にいる人間の思いに逆らうかのように刻み、時間は

すでに0時をまわっていた。

「さてと、そろそろ時間だしおいとましますかね」

そう言うと、みんなぞろぞろと帰って行った。ミサト先生はリツコ先生とトウジとケンスケを送るために車に乗り込み、夜道に消えた。アスカは家が隣のため、数分残った後、家に帰っていった。マナは今日は家に泊まっていくらしい。綾波は自分の部屋に入って早速寝たみたいだ。

僕はマナを先にお風呂に入れた後、お風呂に入った。お風呂についてうのはミサト先生曰く、

「お風呂は心の洗濯」らしい。そうかもしれないと、最近思い始めている。その日にあった嬉しいことや悲しいことをすべて忘れることが出来る……。

そのまま体や頭を洗い流し、お風呂を出た。灰色のスウェットに着替えると、自分の部屋に行った。

「お疲れ、お風呂気持ちよかったでしょ」

部屋の中にはすでにパジャマに着替えていた。マナをどこに寝かせるか、母と相談したが、

「いーじゃない、シンちゃんの部屋に寝かせれば」ということになり僕は反論したが結局折れてしまうのは自分になってしまった。

僕はマナの布団を用意しようと襖を開けたが、マナがその行動を制した。

「一緒にベツトで寝ればいーじゃない」

僕は驚いた。まさかマナがこんなことを言い出すとは思わなかった。

「ダメだよ！そんなの！」

「何、シンちゃんもしかしてやましい事でもって考えてるの？それともそんなに私がここにるのが嫌？」

マナが半ば涙目で僕を見てくる。こ、この瞳は・・・

「そういう訳じゃないよ。でも、その、いつ僕がその、そ、そういうことするかわからないでしょ。だから・・・」

「シンジとならないよ」

「えっ!？」

僕は思わず声をあげてマナを見た。さっきの涙目とは違い、明らかに顔がほのかに赤くなっていることに気づいた。

「いいよ、シンジとなら・・・」

僕はマナのその言葉に誘惑されそうになったが、その気持ちを抑えてマナに言った。

「ダメだよ、僕達はそんなことしちゃいけない。まだはやいよ」

「何でだめなの？」

なおも食い下がってくるマナを僕は必死に説得した。結局、マナは僕のベットで、僕は布団を敷いて寝た。

・・・はあく、今日は疲れたなあ。

そうして僕は深い眠りについた。

この日を境に、みんなの仲は急速に接近した。翌日、母は僕の部屋を見て驚愕したらしい。ベッドの下に敷いた布団の中で、僕とマナが仲良く寝ていたのだと後で知らされた。まあ、僕もマナも気にしてないのだけれど・・・

そして今日は父と母に呼ばれ、「ゼーレ」に行く途中だった。

「しかし誰もいないなんて何か物騒ね」

「そりゃそうよ。緊急避難令状がでてるんだもの。私たちくらいよ、今堂々と道を歩いてるのは」

父は僕の他に、綾波、アスカ、マナ、トウジが呼ばれていた。

「しかし、碇の親父さんはわしらに何の用なんかいなあ？」

「知らないわよ。でもシンジのお父さんに呼ばれるのは初めてね」

みんなでそんな会話をしていると、急に地面が揺れた。

「何、これ!？」

そうみんなで言い合っていると、頭上にミサイルが二発通り過ぎる。

「弾頭ミサイル!？」

僕はそのミサイルの行方を目でたどると、そこには巨大な生物がい

た。

「なんや、あれ!？」

トウジが声を上げる。その生物の周りには戦略自衛隊の戦闘ヘリが後退しながら攻撃していた。と、今まで前進しかしていなかった生物が戦自のヘリを一機素手で攻撃する。制御を失ったヘリは僕達のそばに落下する。それを見届けた生物は急に浮遊してヘリを踏み潰した。

「爆発に巻き込まれる！」

僕はそう思ったが目の前に現れた青いルノーによって防がれる。

「ゴミン、ゴミン。チョッチ遅れたわね」

「「「「ミサト先生!？」」」」」

青いルノーの中から顔を出したのは担任のミサト先生だった。

「リツコも一緒よん！」

助手席にはリツコ先生も乗っていた。

「再会を喜んでいる場合ではないわ。取り合えず、車に乗って！」

リツコに急かされて、ルノーに乗り込む。生物に踏まれそうになったが、ミサト先生の素晴らしいと言えるハンドルさばきでそれを回避すると車を飛ばした。

「あの生物は何なんですか？」

マナが聞く。

「私達は使徒と呼んでいるわ」

「あれは三番目。個体名称はサキエルと呼んでいるわ」

ミサト先生が答えて、リツコ先生が補足した。つまり、あの巨大な生物には天使の名前があり、伝道者であるのだ。僕達はそのままミサト先生な導かれるように市街地の郊外に行った。

「これからどうなるんだろう」

僕達はこれからあの召喚された神々と戦わなくちゃいけないのかと、そう思った。

その察しがまさか正しいとはまだ僕でさえ分からなかった・・・

次回予告

ついに召喚された神々。少年達の身にこれからなにが起こるのか。

そして遂に起動するエヴァンゲリオン初号機。

壊れゆく世界のなかで少年達は何を思い、なにを望むのか。

次回、ANOTHER world 第参話 神対神

さあて、この次もサービス、サービスウ。

第参話 神対神（前書き）

誹謗、中傷はやめてください。見てくれた人は意見、評価をしてくれるとうれしいです。

第参話 神対神

僕達はルノーに乗って移動中だった。ふと、郊外を移動中に地下道を発見するとそのままその中に滑り込んだ。中にはカタパルトがあって、その上に行くときさらに下に降下する。

「これから僕達はなにをするんですか？」

僕は聞いた。すると、ミサト先生は少し困った様子でリツコ先生のほうをみると、息をついていった。

「これからあなた達に使徒に戦ってもらいます」

「・・・はああ!？」

予想通り、五人は驚いた。僕はさっき思っていたことが現実になってビックリした。車はまだ降下し続けている。と、急に目の前が明るくなる。僕は目を細め、さらに見渡すと驚愕した。下には上と同じように地面や山、湖が広がり、中心部にはピラミッドのようなものが見える。

「あれは「ネルフ」。「ゼーレ」に所属する組織の一つよ」

「父さんと母さんはこんなことやってたんだ・・・」

僕は自分のいる世界と母や父がいる世界の違いを改めて実感した。

車はさらに移動し、「ネルフ」の中に入った。僕達はライセンスカードを使ってさらに奥にはいるとミサト先生に誘導されて、ケイジにたどり着いた。

そこには巨大なロボットのようなのが五つあった。紫色、赤色、青色、黒色、山吹色だった。

「これから、あなた達はそのエヴァンゲリオンに乗って、使徒に戦ってもらわうわ」

「はああ！？、なに言ってるのよ！何で私たちがそんなのに乗んないといけないのよ！」

僕達は反論した。無理もない急に連れてこられてこんなのに乗れと言われても反感を買うだけだ。

「しょうがないの、あなた達しかそれに乗れないのよ、世界を救えないのよ」

ミサト先生はそう言うと言いついてしまった。

「乗りたくないのならば、帰ってくれても構わないわ」

リツコ先生はそう言った。その顔は普段は見せない厳しい顔だった。

「いい加減な気持ちでやってもらってもこっちも迷惑なだけだし・・・」

そう言うと言いついて僕達に答えを急かした。

アスカ、トウジ、綾波は立ち去ろうとしたが、僕とマナは考えた後、答えを出した。

「「やります。（僕）（私）がやります！！」」

ケイジ内に僕とマナの声が響いた。三人は

「えっ!？」といった顔になった。ミサト先生は

「いいの？」と少し心配そうに言うが、僕とマナは優しく微笑んだ。

「わかったわ、すぐに準備して!」

ケイジ内が急に騒がしくなる。三人は控え室に案内された。僕とマナはエヴァンゲリオンの説明を簡単に受けた後、いきなり実戦で二機投入はちよつとまずいということで僕が先に出ることになった。

「大丈夫?」

僕がプラグスーツに着替えてエントリープラグというコクピットみたいなのに乗るときに顔をのぞかせて言う。

「大丈夫だよ」

僕はそう言うのとエントリープラグのパッチをしめた。

紫色のしたエヴァンゲリオンに僕が乗ったエントリープラグが挿入される。すると一瞬周りが暗くなった後、目の前が明るくなる。そうすると、右にある小モニターからミサト先生が現れた。

「この機体はエヴァンゲリオン初号機よ。大事にしてやってね」

そう言うと、モニターは消えてしまい、代わりにエントリープラグ内に液体が満たされる。説明を受けていたLCLというものだ。気持ち悪くはなかった。そして、次にエヴァンゲリオンと一体化したような感覚に襲われる。

「ああ、これがシンクロって言うのか・・・」

エヴァンゲリオンはエントリープラグ内にいる人間とシンクロする事で動くらしい。シンクロ率が低いとエヴァンゲリオンは動かないらしい。そうして様々な拘束具が外される。その後、初号機がカタパルトにセットされる。

その過程を第一作戦室でオペレーターやミサト先生やリツコ先生、母や父が見ていた。

「シンクロ率は？」

「64・8%です」

室内では驚きに満ちた声が響く。

「すごいわね。彼の才能ね。」

リツコ先生が言った。他の人も絶賛していた。

「シンちゃん、大丈夫かしら？」

「私達の息子だ。心配するな」

父はそう言って母を気遣った。

「いいわね、シンジ君、使徒はカタパルト射出口の目の前にいると思うわ。でも落ち着いてね」

ミサト先生がモニターで言う。僕は首をタテにふると射出準備がされる。そして……

ガッ！！バシユッ！！！！

遂にカタパルトから射出された。強力なGがかかり、少し苦しんだが、すぐに地上にでた。地上に出るとミサト先生の言う通り使徒が目の前にいた。

「サキエルって言ってたな・・・」

僕は初号機を動かした。エヴァンゲリオンとシンクロしていることの利点は難しい操作をする必要性が無く、自分がイメージする事なく機体を動かせることである。

初号機をサキエルの前まで接近させるとフロントキックをかました。サキエルは吹っ飛ぶ。

作戦室内でも驚きの声上がる。

「すごい、初めてでここまで出来るなんて・・・」

母と父も驚いていた。

僕はさらに初号機を接近させると、今度は連続でパンチをかます。しかしサキエルは数発食らったが、パンチを両手で止める。

「なっ・・・！？」

僕は予想外の動きにびっくりした。

そしてサキエルは両手を封じたまま、ゆっくりと立ち上がる。そして膝蹴りを食らわした。

「・・・っ！、ガハッ！」

エヴァンゲリオンとシンクロしていることの欠点は機体のダメージがそのままパイロットに影響することである。パイロットに外傷は無いが、痛みを感じるのである。

サキエルは膝蹴りをかました時、僕は力を抜くという過ちを犯した。サキエルは力を抜いた状態の初号機の腕を力強く引っ張り始めた。

「・・・っ！、があああっ！！」

僕は痛みに耐えきれず、叫んでしまった。本部や控え室でもその叫び声が届く。

「シンジ・・・」

マナの心配そうな声が控え室に響いた。作戦室内では母と父も心配していた。サキエルはそのまま腕を引っ張り続け、そして・・・

バキッ！

初号機の左腕が折れた。僕にもそれ相当の痛みが体中を駆け巡った。

「・・・、くううっ！」

僕はこらえた。マナ達に心配させないためだ。サキエルは次に初号機の頭部をつかむと掌からから槍を出力し、連続して攻撃し始めた。

「・・・っ！、この・・・！」

僕は痛みに耐えながら初号機で蹴りをかまそうとした。しかし、初号機が動かない。

「・・・！、運動機関、停止！」

「何ですって！？、神経接続解除！。シンクロを切って！」

運動機関が停止したとはいえ、シンクロが解除されたわけではない。このままだと、初号機は動かないままパイロットにダメージを与えられる状態になる。そうなのはパイロットの痛みによる精神崩壊も免れない。

「・・・ダメです、信号受け付けません！」

「そんな・・・」

「このままだとパイロットが耐えられなくなります！」

「・・・エヴァンゲリオン肆号機を起動させます。霧島マナを十分以内にエントリープラグに乗せて、発進させて！」

ミサト先生の命令を受けて、肆号機の発進準備が開始される。

マナは控え室に入ってきた職員に誘導されて、プラグスーツに着替えるとエントリープラグに乗った。そして初号機と同様にカタパルトにセットされると射出された。

シンクロ率は65.8を記録していた。

肆号機は射出の力を使って、空に飛んだ。ちょうど初号機はサキエルの攻撃を受け、吹っ飛んでいた。

「シンジ！」

肆号機は空中で一回転すると、サキエルに向かってプラトンキックをかました。サキエルは突然のことに反応出来ず、もろにくらい、吹っ飛ぶ。

ちなみに初号機はこの段階で全ての機能を停止していた。

僕はエントリープラグの中でマナと肆号機の戦いを見ていた。

「こんのおお！」

肆号機はサキエルに続け様に跳び蹴りをくらわすと、距離を開ける。と、その時サキエルは顔を肆号機に向けると、ビームを発した。肆号機は突然の攻撃に対応出来ず、右腕を焼き切られる。

「・・・！、キャアア！！」

マナは痛みに耐えきれず叫び声を上げる。

「・・・マナ！」

僕に力があれば、力が・・・。誰か僕にみんなを守れる力を・・・。

僕がそう望んだとき、急に悪寒に襲われた。そして・・・

「初号機、再起動！」

「そんな、まさか暴走！？」

初号機は顎部ジョイントを引きちぎると、雄叫びを上げた。

「なに、あれ・・・」

マナは息を乱し、脂汗を上げながら初号機を見た。その姿はまるで悪魔のように見えた。

初号機はしゃがむと、ジャンプしてサキエルに取り付く。そして蹴り飛ばした。さらにサキエルに接近する。しかし目前で幾何学模様をした壁によって防がれる。

「A・T・フィールド！？あれがある限り、使徒に接触できない！」

A・T・フィールドは使徒とエヴァンゲリオンがもつバリアみたいなものだ。強力なものだと光や音さえも通さなくなる。

初号機は一旦よろめくがすぐに体制を立て直す。

そして左手をかざすと折れた部位が再生して元に戻った。

そしてA・T・フィールドを掴んで、中和していく。

そして使徒のA・T・フィールドを破った。

そして初号機が接近するとサキエルはビームを放った。しかし、それは初号機のA・T・フィールドによって防がれる。初号機はその後、サキエルをぶん殴ると、左肩のラックからプログレッシブナイフを取り出すとサキエルのコアに突き刺した。サキエルは数分うごめた後、初号機に寄りかかるようにして活動を停止した。そして、爆発した。

その爆発の中に立っている初号機はまさに悪魔のように見えた・・・。

次回予告

遂に第参使徒、サキエルを倒したシンジとマナ。さらにアスカ達もエヴァンゲリオンパイロットに名乗りを上げる。

仲間を増やし、使徒を倒すことを誓ったシンジに降りかかる試練とは。

次回 ANOTHER world 第肆話 決意の朝に

さあて、この次もサービス、サービスウウ！

第肆話 決意の朝に（前書き）

誹謗、中傷はやめてください。よんでくださったかたは評価、感想をお願いします

第肆話 決意の朝に

僕が気づいたときにはベットのの上にいた。周りにはマナやアスカ、綾波がいた。

「シンジ・・・、よかったああ！」

マナは目に涙を溜めたまま抱きついてきた。

「見せつけてくれちゃって。でも良かったわね、無事で」

「今度は私たちも戦うから、無茶しないでね。」

彼女達の意志を僕は不快に思うことはなく、むしろ一緒に戦ってくれる頼もしさを感じていた。

「あれ、トウジは？」

僕はトウジがいないことに気づいた。

「あのバカはまだ訓練中よ。後でくるって」

僕はそれを聞くと、安心した。みんなが同じ思いを持ってくれたことにすごくうれしきを感じ、同時にこれからも彼らを守って行かなくてはならないと改めて感じた。

その後、みんなはマナを残して帰って行った。
マナとはこの間の戦闘のことについて話した。

「ねえ、シンジはどうやってあんなことしたの？」

「あんなことって？」

「覚えてないの？」

「肆号機が右腕を焼き切られたところから覚えてないんだ・・・」

これは本当の事だった。肆号機がやられて守りたいって思ったときになんかすごい感じになって、その後は覚えてない。

マナは考え込んで、それから言った。

「じゃあ、左腕の自己再生やA・T・フィールドによる防御と浸食はシンジの意志じゃないってことね」

「僕、そんな事したの!？」

「シンジ、これからも何か不思議なことが起こるかもしれないけど気をつけてね」

僕は

「うん」と言うと、マナは安心したようにして家に帰っていった。時間をふと見ると、午後十時をまわっていた。僕は深い眠りについた・・・。

そして翌日、僕は早朝に退院して学校に行った。

「大丈夫か？」

教室には行ってくるなりトウジが近寄ってくる。

「大丈夫だよ」

と言ってもトウジは信じてくれるわけでもなく、説得することに朝の時間を使ってしまった。

「よし諸君またまた転校生を紹介する！」

最近やけに転校生が多いな。やっぱりエヴァンゲリオンが関係してるのかなあ。

僕がそう思っているときに、廊下から二人入ってきた。

「渚カヲルです。みなさんよろしく」

「光ハクオウです。よろしく」

カヲルという人は髪が白髪で、男子だというのに女子に勝る美貌を持っていた。もう一人のハクオウと言う人は髪が茶色でまさに中学生といった感じの人だった。

「あっ!!」

急に綾波が立ち上がった。

「やあレイ、久し振りだね」

まさかレイの仲良しだった子ってカヲル君のことだったのか。

「何であんたがここに来るのよ!」

「何でってレイに会うために決まってるだろ」

カヲル君は笑いながら言った。周りが凍りつく。カヲル君はそれを察知したのか、

「今の冗談だよ」と言ってハクオウ君と一緒に席についた。

そして時は過ぎて放課後・・・

「シンジ君、「ネルフ」にはどう行けばいいの？」

カヲル君とハクオウ君が僕のところにきてライセンスカードを見せてながら言った。周りにいたマナ達も驚いた顔をしている。

「・・・もしかして、エヴァのパイロット？」

「もしかしくてもそうだよ。僕は伍号機のパイロット」

「僕は陸号機のパイロット」

なるほど、だから最近転校生が多いんだな。
そうして僕らは「ネルフ」へ行った。

「あり！？、なんでシンジ君達がカヲル君とハクオウ君というの？」

本部に行くなりミサトさんが言った。ちなみにミサトさんと呼ぶようになったのは本部内で先生と呼ばれるのは恥ずかしいらしい。リツコさんも同じだ。

「なんでって学校同じだからこうなるでしょ？」

レイが言った。ミサトさんはそりゃそうよねといった顔になると機体を見せにケイジに行った。

「これがエヴァンゲリオン伍号機よ」

伍号機は双眼で背中に翼がついていた。機体色は黄色と白と青を随所にバランスよく塗ってあった。

「S2機関搭載型で、アンビリカルケーブルが無くても動けるわ。つまり、電力切れがないってこと。先に製造したエヴァンゲリオンも後に取り付ける予定だわ。それと、背中の翼は敵の遠距離攻撃を防げるように加工してあるわ。他の詳しいことは後で教えるわ」

僕は実際に羨ましいと思った。先のエヴァンゲリオンは基本装備だけだもんね

今度は陸号機の説明をした。陸号機はバイザー型の眼をしており、紺色主体の機体色をしていた。

「これはエヴァンゲリオン陸号機。伍号機とは違ってS2機関は無いわ。でも近距離武器は豊富よ。他にもファルザーっていう武器があるわ。これは伍号機にも標準装備されてるもので、オールレンジ攻撃を可能としている。その他にもファルザー自体にビームやA・T・フィールドをまともさせて直接アタックすることも出来るわよ」

そう言うのと、各自を解散させて訓練に向かわせた。しかし、ミサトさんは疑いの眼差しをある人物に送っていた。光ハクオウである。

「あの子、なんか怪しい気がするのよね」

「どうしたの？、人を信じすぎるあなたが怪しいなんて言うなんて」

「だってマドウルック機関の選抜全過程をパスしたのよ!？」

「それだけ能力があると認められたんじゃないの？」

「そうだとってもさ〜・・・」

リツコさんも怪しがっていたのは確かだ。しかしなにも手がかりが無い以上、泳がせているわけだ。

「今は泳がせておくのが得策だと思うわ」

そうしてミサトさんを説得させて仕事についた……。

それから3ヶ月後……。

「パターン青！！使徒です！」

第参東京都の海から突如イカにも似ている、両手に触手を持った使徒が来た。

「個体名称はシャムシエルと名称。エヴァンゲリオンの出撃急いで！」

その後、ミサトさんの判断でアスカが乗る弐号機が前線を担当。綾波の乗る零号機とトウジの乗る参号機はライフルによるバックアップを担当するようになった。初号機は暴走の危険性があるため、待機命令が出された。肆号機はまだ右腕の修復が完了していないため、出撃不可になった。

「エヴァンゲリオン、発進！」

ミサトさんの号令により、勢いよく三機出される。弐号機はシャムシエルの前に参号機と零号機は弐号機の後方に長距離射程ロングライフルを持って配備される。弐号機はパレットライフルを持っている。

「アスカ、いくわよ」

アスカは自分をこうして奮い立たせていた。そうして式号機はシャムシエルにむけてパレットライフルを放った。シャムシエルはもろにくらった。たがあまり効果は無く、爆炎の中から触手が飛んでくる。

「くっ！」

式号機は素早くかわすとパレットライフルをシャムシエルにむけて投げた。シャムシエルは触手でそれを破壊する。その瞬間、式号機はプログレッシブナイフをラックから取り出し、接近する。

「援護して！」

「分かったわ！」

「まかせとき！」

そう言うとき参号機と零号機はロングライフルを構えるとシャムシエルにむけて放った。

シャムシエルはA・T・フィールドによってそれを防ぐ。

「もらったああ！」

式号機はA・T・フィールドを展開してシャムシエルのA・T・フィールドを中和する。そしてコアにプログレッシブナイフを突き立てた。シャムシエルも式号機の腹部に触手を突き立てるが、コアに対する傷が深く、活動を停止した。

式号機と参号機と零号機は初勝利を飾ったのである。

その後パレットライフルを投げて中距離オプションを自ら無くした行為はミサトさん達にこびっとく言われたのは言うまでもない・・・。

次回予告

遂に第肆使徒を倒したシンジ達。しかし、さらに立ち上がる試練とは。

そうして明らかになる使徒と人間の共通点。

次回、第伍話 使徒と人間

さあて、この次もサービス、サービスウウ！

第伍話 人間と使徒（前書き）

すみません。前回の予告や、タイトルと関連性の少ない話になってしまいました。がご了承下さい。

第五話 人間と使徒

「どんなもんよ！」

アスカは第肆使徒、シャムシエルを倒してちょっと調子に乗っていた。まあそういうところが彼女らしいのだけれど。

今日からカヲル君やハクオウ君もシンクロテストに入る。エヴァのパイロットの身体能力を高めるための訓練も始まった。

「高レベルね。この子達は」

シンクロテストでは、僕が76・6、マナが62・1、アスカが52・5、レイが48・2、トウジが45・7、カヲル君が75・6、ハクオウ君が80・1をマークした。訓練でもみんな組み手をしたときには負けず劣らずの実力だった。

「つかれた〜！」

全ての過程が終わったときはみんな疲れ果てていた。

「みんな、今日は夕食おごるわよ！」

「やрийい！。ミサト、みんながおいしいっていうお店に連れてきなさいよね」

「その言葉、覚えておくのね！」

レイとアスカは張り切った。ほかのみんなもウキウキ気分だった。そしてミサトさんの乱暴な運転に揺れられて、郊外のはずれにある小さなレストランに連れて行かれた。

「ここは二人で一つの部屋っていう個別割りなの。二人一組に別れて部屋に入ってちょうだい」

とまあそういうことなので、僕とマナ、アスカとレイ、トウジとカヲル君、ミサトさんとハクオウ君に別れて部屋に入った。

そうして僕らは食事に取りかかった。このレストランはバイキング方式で、好きなものを好きなだけ取れるという店だった。僕は肉類などバランスよく盛りつけると、マナと一緒に食べた。

「シンジと付き合ってもう二年になるね」

「うん、そうだね。告白された時は驚いたなあ。いきなり帰りに屋上に呼び出されて何かなって思ったら『好きです!』だもんね」

「シンジも期待してたんでしょ?。知ってたんだからあの時みんなが噂してたんだよ。『シンジは私のこと好き』だって」

「まあね」

「両想いって知ったときは嬉しかったなあ。そうして今に至ってるのよね」

今日のこと意識してるな。だったらこんな事言わないもんな。

僕はそっと鞆を取り出すと中から袋を取り出した。

「はい、マナ。誕生日おめでとう」

マナはすごくうれしそうな顔をして僕を見た。

「覚えててくれたの?」

今日はマナの誕生日。そして初めて僕がマナと出会った日だ。
マナは袋を開けた。

「これって・・・」

袋に入っていたのはマフラーだった。

「去年ほしがってたやつだろ。去年は在庫切れとかで買えなかったけど今年はあったんだ。でも苦労したんだよ。去年の物とはいえ人氣は変わらず、売れ切ればっかだったんだ。でもすごく探して、それで見つけたんだ」

「シンジ、大好き!!」

マナはマフラーを持ったまま抱きついてきた。僕はマナを受け止める。さらに僕はマナをテーブルにつかせると、今度は箱を取り出した。

「あけてみて」

マナはその箱を開けると中からケーキが出てきた。

「ケーキは毎年作ってるから今回も作ってみた」

それはチョコレートケーキだった。マナは丁寧に包丁で切ると口に運んだ。

「おいしー!」

「今年の冬は寒いしな。マフラー、大事に使ってね」

「うん！」

マナはそういつて嬉しそうにうなずいた。

僕はこの笑顔を守らなくちゃいけない・・・

僕は改めてそう思った。

「・・・それで、あなた何者なわけ？」

ミサトさんがここを選んだ理由。それはハクオウ君と話をする事だった。やはりミサトさん自身、泳がせておくわけにはいかなかったようだ。

「何がです？」

「マドルック機関の選抜全過程をパスしたあなたには何かが絡んでいるでしょう？」

「どうでしょうか。僕はただ碇君のお父さんに呼ばただけですがね」

ミサトさんはそれでも疑惑の目をしている。

「まあ、何かが絡んでいるのはあながち嘘ではないね。でも、これはあなたには絶対に理解できないし、同意してくれないだろう。でもいづれわかることだよ」

「・・・」

「ありがとうございました。美味しかったですよ。また、機会があったらお願いしますね」

そうしてハクオウ君は帰って行った。

「光ハクオウ、あの子はいい……」

そんなこんなでみんなが満足したときには九時をまわっていた。

「みんな、おくってくわよ」

ミサトさんがそう言ったのだがみんなあの乱暴な運転にはつき合えないみたいで結局、個人個人で帰ることになった。マナは今日は僕の家に泊まっていくみたい。

最寄りの駅で電車に乗り、「第参東京都第肆地区駅」で降りて、途中でアスカとカヲル君とトウジと別れた。さらに途中で綾波と別れた。アスカと綾波は自ら一人暮らしすると言いだし、それぞれ家を持っていた。

そうして歩くこと三十分……

家に到着。鍵を使って玄関を開けると真っ暗だった。電気をつけて、リビングに行くとき書き置きがあった。

「今日は仕事で帰ってこれません。戸締まりをしっかりしてね。母より」

ヤバイ、これは最高、いや最悪のシチュエーションだ！

僕は取りあえずマナをお風呂に入らせると寝るところを考えた。この間みたいに一緒に部屋で寝ることのないようにしなくては……。僕は取りあえず綾波が使っていた部屋でマナを寝かせるようにした。

「気持ちよかったわよー！シンジ、次入っていいわよ」

マナがお風呂から出てきたので入れ替わりでお風呂に入った。

そうして数分後・・・

「ふー、気持ちよかった」

僕はスウェットに着替えてリビングに行った。

「あれ、どこに行ったのかな？」

リビングにいるはずのManaがいない。周りを見渡したがいないので廊下に出た。と、そこに倒れているManaを見つけた。

「・・・Mana！」

僕は素早くManaの元に駆け寄った。息が荒い。額に手を乗せた。

「熱がある・・・」

僕はManaを抱き抱えるとManaが寝るはずの部屋に運んでベットに寝かせた。

「うう・・・」

僕はManaが辛そうにしているのを再確認するとすぐに台所にいった。氷水とタオルを用意した。タオルを氷水に濡らすとManaの額に置いた。

「Mana・・・」

熱を計ってみると三十九度一部もあった。いつも元気になっているManaがこれほどの熱を出すのは初めてだった。

とはいえさすがMana、濡れタオルを何回か交換しているだけで落ちてきてきたみたいだ。熱は未だ変わらずだが・・・。

「落ち着いてきたみたいだね。じゃあ僕は自分の部屋で寝るから辛くなったら起こしてね」

僕はそう言って立ち上がった。その時に、布団の中から出た左手が僕の右手を掴んだ。

「マナ・・・？」

「行かないで。お願い。すごく怖いので、今一人でいるの・・・」

マナは目に涙をためて必死に言った。

「うん、そうだね」

そうして僕はマナと一緒に寝ることにした。マナは僕の部屋が良さらしいのでマナを抱きかかえて連れて行った。

こうして気持ちが悪くなり落ち着いた状態で抱き抱えるとスウェット越しにマナの体温を感じ取れる。僕は少し頬を赤らめて運んだ。

前マナが泊まったときと同じようにマナをベットに寝かせ、僕は下に布団を引いて寝ることにした。

「辛かったら言ってね。起きるから」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

そう言って僕は眠りについた。

そして三時間後・・・

僕はおなかの方に重さを感じて目が覚めた。まだ覚醒しきれない目でおなかの方を見てみると、一気に覚醒した。なんとマナが僕のおなかの上に横たわっていたのだ。

「マナ・・・！」

「シン・・・ジ・・・」

見るからにつらそうだ。どうやら僕を起こそうとして落っこちたんだな。

僕はマナを抱えてベットに戻そうとしたが、マナ自身力が入らないらしく、持ち上がらなかった。僕は今まで寝ていた布団にマナを寝かせると、ベットに寝ようとした。

「シンジ、一緒に・・・寝て」

僕は驚いてマナを見た。マナの右手はすでに僕の右手を掴んでいた。

「お願い。シンジと寝るとすごく気分が落ち着くの」

その後も言われ続け、結局マナの隣に布団を引いて寝ることにした。マナはすごく嬉しそうで安心した顔をして眠った。

そして翌日・・・

「う・・・うん」

僕がマナより先に目が覚めた。体が重い。というか手足が動かない。僕は目線を下にして体全体を見てみてびっくりした。なんとマナの足と僕の足が絡んでいてマナが抱きついている状態だった。

「マ、マナ・・・」

僕はマナを起こさないように離れようとしたが、想像以上の力で離れない。僕は考えているときにもさらにマナが力を入れて寄ってくる。

ヤバイ、ヤバイぞ！

「シンちゃん、朝ご飯よ」

母がいつの間にか帰ってきていたのだ。まずい！
考えに考え抜いて僕は寝たふりをした。

「シンちゃん！」

母が自分の部屋に入ってきた。

「・・・ふふ、そっとしておきましょうかね」

そう言ってまたリビングに戻ってしまった。結局僕はマナを起こすことにした。僕は優しく体を揺らす。

「マナ、朝だよ。起きて」

数回揺らすとマナは目を覚ました。

「・・・おはよう、シンジ」

「おはよう」

「・・・」

「・・・」

「その、マナ・・・」

「なあに、シンジ？」

「え、と、その、ちょっと離れない？。まだ熱も下がってないみたいだしさ。医者にいこうよ」

「・・・やだ」

「へっ!？」

「医者行きたくない。こうしてた方がいい」

そう言ってマナはさらに強い力で抱きついた。

「マ、マナ!」

僕が叫んでもまったく聞かない。ああもう!

「シンジ・・・」

結局僕はマナにつきあうことにした。この際とことんつき合ってやる。

そうして僕はマナを優しい力で抱き寄せた。マナは少し驚いた顔をしたが、その後に安心したような顔をして僕の胸に顔をうずめた。

「シンジ・・・」

もう一度僕の名前を呼ぶ。彼女だってまだ中学二年生だ。色々ありすぎて不安だったんだろう。

ふと、僕がこんな風にマナを抱くのは初めてだと思った。僕は常にマナの味方でなくてはならないと感じた。今まで色々あった。これから色々あるだろう。マナが傷つくかもしれない。その時に誰がマナを癒すのだろう。

・・・無論、僕だ。マナは強い女の子かも知れない。でも本当はとても弱い女の子なのだ。だから、僕が受け止めないといけない。それがマナを選んだ僕の義務であり務めなのだ。

僕はもう一度さらにマナを抱き寄せた。今度はマナの彼氏である碇シンジとして。

僕はマナを守らなくちゃいけない立場の人間だ。甘えは許されない。僕はそれを心に決めた。

そうしてマナと抱き合うこと数時間・・・

さすがにマナもおなかがすいてきたみたいだ。

「ご飯にしようか・・・」

「うん」

そうして僕はマナに上着を着させるとリビングにいった。

「あらあら、二人とも終わったの？」

母がニコニコ笑いながら出迎えた。

「マナが熱を出してるんだ。解熱剤、なんかない？」

「大丈夫なの！？。それとも、愛しのシンちゃんと抱き合って熱なんか下がっちゃったかしら？」

「なに言ってるんだよ、母さん！」

「はい！」

「あら、じゃあ今日一日家に泊まりなさいよ。今日明日はお休みだしね」

「そうさせていただきます！」

「マ、マナ・・・」

結局マナは今日も泊まることになった。とは言っても僕が看病するためどこに行くということはできなかった。

時間はもう昼をまわっていた。取りあえず消化にいいものをマナに作ってあげて、僕はパンを数枚かじった。昼食を終えた後はマナを僕の部屋のベットに寝かせ、看病をした。とは言ってもほとんど喋っているだけだった。それでもマナの体調が良くなるのが目に見えてわかった。ああ、取りあえず良くなってきてるんだなと思った。そんなことをしているともう時間は五時過ぎだった。とそのときだった。

ピピピ・・・

突如、「ネルフ」から支給された連絡用携帯電話が鳴った。召集連絡だった。

「マナはここにいて。僕が行ってくる」

そう言って自分の部屋を出ようとしたとき、急に母が出てきた。

「あなたはここにいなさい」

母はそう言うなり、扉の前に立ちはだかった。

「でも・・・！」

「あなたの今の役目はマナちゃんのそばにいてあげることでしょう？」

「・・・！」

「心配しなくても大丈夫。もっとあなたの仲間を信じなさい」

「・・・分かったよ、母さん」

そうして僕は今回はマナのそばにすることにした。なにものでもない自分の意志で・・・

その頃の「ネルフ」本部は・・・

「第陸使徒、依然進行中！」

「作戦上、第陸使徒をラミエルとします」

「エヴァの発進準備は整ってないわ。長距離ビーム砲で迎撃！」

するとトンネルの近くに配置されたビーム砲からビームが発射される。と同時に正八面体の姿からビームがくる方向に対してその面を平らにしてその部分からA.T.フィールドを展開してビームを防いだ。その後、その姿から今度、等しく二つに分かれると間にある

コアから陽電子質量のビームを放った。一気にビーム砲とその周囲が蒸発した。

「なんちゅーデタラメな強さなの？」

「A・T・フィールドは肉眼で確認できるほど強力なものです。陽電子ビームも大した破壊力です」

「エヴァによる近距離の戦闘は無理に等しいわね」

「どうすればいいかしらね・・・」

その時、ミサトさんが何を思い浮かべたのか笑っていた。

「どうしたの？」

「チョツチいいことを思い出してね。すぐに戦陸自にへりを飛ばしてくれる？」

「なにをするきなの、ミサト？」

「チョーツチね」

そうしてミサトさんはへりを使って戦陸自まで行った。

そして数時間後・・・

「おまたせー」

「よくこんなもの持ってきたわね。さすが作戦部長だわ」

「急だから細かいところまでは手が回らなかったけどまあいいでしょ？。これが戦陸自が保有していた『ポジトロン・スナイパー・ラ

イフル』よ」

「超長距離レンジからの陽電子攻撃ってよく思いついたわね」

「ええ。でも陽電子攻撃をするには日本中の電力が必要な。だからもう少し準備に時間がかかるわ」

そうしてラミエルの討伐作戦が開始された。エヴァンゲリオン全機はラミエルから百キロ先にある華美山に配置された。『ポジトロン・スナイパー・ライフル』の射撃手はカヲル君が乗る伍号機だった。零号機、弐号機、参号機は陽動のためと伍号機が存在が分からないようにするために離れたポジションに配置された。陸号機は万が一伍号機に攻撃が来たときのためにA・T・フィールドで加工されたシールドを持って伍号機の近くに配置された。

そして午後十時にすべての準備が整った。

「作戦は前言った通りね。危険だけどエヴァ三機による陽動でラミエルを拡散した後、伍号機がビームを放つ。陸号機は防御をおこたらないでね」

そして作戦が開始された。

華美山に伍号機と陸号機が配置される。

「作戦開始！」

ミサトさんの号令と同時にエヴァ三機が拡散した。

ラミエルは三機を認めると周囲に小さな正八面体の者一列に展開、それを回転させるとコアから陽電子ビームを周りを風ぐように放った。

「・・・！」

まさかこんな攻撃をするとは思わなかった三機は不意をつかれたがすぐにA・T・フィールドを展開し、防いだ。

「キツイわね・・・。でも！」

一気に出力を上げ、A・T・フィールドを強くした式号機が少しずつラミエルに接近する。それを確認したラミエルは一旦攻撃を中止、すぐに今度は正八面体の四端を分離、その間からコアを四つ展開すると一カ所にビームを収束して式号機に放った。

「・・・！、くうう！」

式号機に出力の大きくなったビームをA・T・フィールドで受け止める。そこに零号機が駆けつけ、A・T・フィールドを展開した。

その瞬間に参号機が陽電子ビームの収束を遅らせる弾をラミエルに当てた。

「とらえた！」

その瞬間を見逃さずに『ポジトロン・スナイパー・ライフル』の引き金を引く。ラミエルもそれに気づき式号機に対する攻撃を中止、相殺するために陽電子ビームを放つ。しかし収束しきれなかったビームは逆に消滅され、そのままコアを貫かれた。

「ゴオオオ・・・」

悲鳴のような声をあげた後に爆発した。

「よおおし！」

彼らはラミエルの討伐に成功した・・・。

——— 次回予告

ついに第伍使徒を殲滅に成功したカヲル達。

そこにさらに出現する第陸使徒。そしてシンジ達に迫る裏切りとは。

次回 ANOTHER world 第陸話 仲間の裏切り、そして

さあて、次回もサービス、サービスウウ

第陸話 仲間の裏切り、そして（前書き）

オリジナルストーリーを少し入れてみました。

第陸話 仲間の裏切り、そして

「よっしゃ！」

ついにラミエル殲滅に成功した。しかし余韻に浸っている場合ではなかった。

「パターン青！使徒、接近してきます！」

「何ですって！？」

「モニターにうつします」

画面にはゆっくり進行してくる若干猫背になっている人型の使徒が見えた。

「すぐに戦闘配置！伍号機以外はすぐにパレットライフルを装備して！式号機はソニックブレイブを装備して！」

すぐにその声に反応してエヴァが動き出す。式号機はソニックブレイブという薙刀のようなものを装備、伍号機はポジトロン・スナイパー・ライフルをそのまま装備、他のエヴァはパレットライフルを装備した。

「使徒、来ます！」

「第陸使徒はイスラフェルとするわ」

イスラフェルはゆっくりと上陸した。と、その瞬間に伍号機のポジトロン・スナイパー・ライフルが火を噴いた。

ズガァァン・・・

見事にイスラファエルに直撃。コアを貫いて殲滅したかに見えた。しかし・・・

「使徒、活動再開！」

なんと、イスラファエルは一体から二体に分離した。

「ふざけんじゃないわよ！」

式号機が接近してソニックブレイブをイスラファエル（甲）に振るった。しかし、その攻撃も容易に防がれる。

「この・・・！」

イスラファエル（乙）も他のエヴァの攻撃を受け付けてなかった。

「もう一度元の形に戻すわよ！」

零号機はイスラファエル（乙）に攻撃を加える。それに便乗して他のエヴァも攻撃を加えてイスラファエルは一体の形になった。

「今が覚醒の時・・・」

「・・・！。陸号機のシンクロ率上昇！。これは・・・400%以上です！」

「パイロットは！？」

「心理プラグ反応あり。生きてます!」

「なにが起こったの・・・」

「エヴァとの融合ね」

「陸号機、顎部ジョイントを引きちぎりました!」

雄叫びをあげる陸号機。そしてイスラファルに向かってジャンプした。そしてイスラファルに取り付き、倒した。

「ハクオウ・・・?」

アスカが名前を呼ぶが反応しない。そして・・・

ガブッ!!

陸号機がイスラファルを捕食し始めた。

「使徒を・・・喰ってる!?!」

そしてみるみるうちにイスラファルを食い尽くすとまた雄叫びをあげた。そして・・・

「ありがとな、〔ネルフ〕の皆さん!」

「ハクオウ君!?!」

「パターン青!!。使徒の反応です!」

「何ですって!?!」

「俺は今この段階で使徒を名乗る。第漆使徒アギエルだ!」

「あんた、調子に乗ってんじゃないわよ!」

式号機がソニックブレイブを構え、アギエルに向かう。しかし・・・

キャイーン!!

アギエルの眼下にA・T・フィールドが展開される。

「初めからこれが目的だったの!?!」

「当たり前だ。エヴァ一機の奪取とそのオリジナルに似せたエヴァのコアとの融合・・・」

「アダムとの融合を!?!」

「ああ。そして今それを成し遂げた!」

アギエルはA・T・フィールドでソニックブレイブを跳ね上げた後、式号機に蹴りを加えた。

「こんのおお!」

式号機は蹴りをくらったが踏ん張り、その反動を使い、一気に接近した。

「甘い!」

アギエルは腰部からファルザーを展開した。
ビシュッ!

全方位からビームが式号機へ向かう。しかし、それは式号機のA・T・フィールドによって防がれる。

「反応はいい。だが！」

いくつかのファルザーがA・T・フィールドを展開して式号機に突っ込む。A・T・フィールドに阻まれるが少しずつ中和していった。

「・・・！」

式号機がそこから逃げようとするが時すでに遅し。中和しきったA・T・フィールドを破り、ファルザーが式号機に突き刺さった。ついで、A・T・フィールドによって防がれていたビームも式号機を貫いた。

「・・・キャアアア！！」

さらにアギエルは左肩のラックからプログレッシブナイフを装備すると接近して右肩を切り裂いた。

アスカは苦痛のため身をよじる。

「くうう・・・」

さらにアギエルは式号機の首部を切り裂こうとした。

「全神経接続解除！。急いで！」

ズバッ！！

式号機の首部が切り裂かれた。

「・・・私、ついてるわよね・・・？」

ミサトさんのおかげでアスカの命は助かった。ただ神経接続を解除してしまったから再接続しないと起動しない。しかしそれはとてもリスクの高いことだった。

アギエルは式号機のアンビリカルケーブルを切断すると違う目標に向かった。

「二人がかりでいくで！」

「ええ！！」

零号機と参号機がそれぞれ展開してパレットライフルを放つ。アギエルはA・T・フィールドを展開して防いだ。参号機は接近してそのA・T・フィールドを中和しようとした。アギエルのA・T・フィールドを中和していく参号機。

「後ろが無防備だぞ」

アギエルがいつの間にか展開していたファルザーが参号機に襲いかかる。そしてファルザーから放たれたビームがアンビリカルケーブルを切断、参号機を貫いた。

「負けられへんわ！」

なおも中和し続ける参号機。そして中和した直後・・・

「悪いな」

伍号機がポジトロン・スナイパー・ライフルを打ち、アギエルの左

肘を貫いて見せた。

「裏切るつもりかああ！、使徒のくせに！」

「カヲルが・・・使徒！？」

「ホンマかいな、カヲル！」

「・・・ああ、そうだよ。僕は使徒だ。タブリスと呼ばれている」

カヲルはギュッと操縦桿を握り締めたまま話す。

「今までは・・・ね。でも今日からは違う。渚カヲルという一人の人間として生きていく」

「なにを戯れ言を！」

「僕は決めたんだ。使徒として生きてくよりも人間としてのほうが何倍もその生の方が価値があるって気づいたから」

「所詮、お前はその程度だったってわけだ」

「きみがどう思ってくれても構わない。ただ僕は僕だ。変わらない。これは僕に対する絶対的自由ってわけさ」

「・・・ふん！」

その瞬間に参号機の体内電力が切れた。それをアギエルは確認すると参号機の左肘を引きちぎると自分の左肘にあて、再生した。

「ならばカヲル、お前を抹殺する！」

アギエルはプログレッシブナイフを装備して接近して来る零号機を

見ると片手を上げ、振り下ろした。

「・・・なっ!!」

アギエルが振り下ろした片手の軌跡をたどるかのようにA・T・フィールドが零号機を襲い、零号機のA・T・フィールドを切り裂いてダメージを与えた。

「くううう!!」

レイにもそれ相当のダメージが加わる。

アギエルはその後零号機のアンビリカルケーブルを切断して邪魔にならないようにどけた。

「エヴァ三機の回収急いで!!」

「エヴァ初号機起動!!」

「ミサトさん、僕がでます!!」

「シンジ君!!・・・分かったわ!!、出撃!!」

伍号機はすでにポジトロン・スナイパー・ライフルを捨てていて、プログレッシブナイフを装備していた。

「そろそろかい?」

「なにがだ?」

「シンジ君がだよ」

すると突然後方からの攻撃にアギエルは襲われた。

「碇！」

「どうして君が！。信じてたのに！」

初号機が日本刀に似た『マゴログ・E・ソード』を装備していた。

アギエルはプログレッシブナイフを媒介にしてA・T・フィールドを刀のように変化させ、初号機に迫った。初号機はマゴログ・E・ソードでそれを受け止める。

「なんでだよ、何で君が！」

「人間とは常に不完全な生き物さ。他人がいなければ生きていけない。そんな君たちを補完するために僕たちは存在する」

「無意味な存在意義だな。結局、君は使徒としての生きるための口実を作り出しているだけだ」

「だいたい、人間は限りある命の代わりに高度な知能を持っているが、結局使徒と呼ばれる僕たちも知能をつけてきた。しかも限らない命をもって」

「限りある命だから人はここまで個々を高めることができた」

「だか人は他人が存在出来なければ生きることができない。そのくせして他人との接触で傷つき、拒否し、壁を作る」

「でもその壁のおかげで自分を自分と認識できる」

「君はどうしてそこまで不完全な人に希望を持てるんだ？」

「完全なものなんてつまらないじゃないか。大体、完全なものなんてこの世に存在しない」

「完全なものになれば傷つくことも、他人とふれあうこともなにも不快なことは感じなくなるんだよ？」

「僕はそんなのはヤダ。僕は僕個人を、他人をもっと大切にしたい。だから僕は戦う。そうきめたから」

そうしてマゴログ・E・ソードでプログレッシブナイフを跳ね上げ、蹴りを加えた。

「ちっ！」

アギエルはファルザーを展開、オールレンジ攻撃を始めた。初号機はA・T・フィールドでそれを防ぐ。そこにA・T・フィールドをまとったファルザーが中和しようとした。

「その程度のA・T・フィールドではきかない！」

シンジの言ったとおり、A・T・フィールド中和はファルザーのA・T・フィールドでは出来なかった。

「いいや、時間稼ぎにはちょうどよかったさ。見せてやる、俺の本当の姿を」

すると突如「ネルフ」の機器がすべてブラックアウトした。

「どうしたの？」

「これまでにない強さのA・T・フィールドです！。モニター出来

ません!」

「そんな・・・シンジ君」

アギエルはA・T・フィールドの翼を展開していた。そして紺色をした槍を持っていた。

「あれはまさか・・・!?」

「ロンギヌスの槍だな」

「そしてA・T・フィールドの翼・・・やはり」

「神殺しの使徒か・・・」

「なぜ君がロンギヌスの槍を!？」

「ほう、この槍のことを知っていたか。まあいい、話してやる」

アギエルはロンギヌスの槍を構えて言った。「簡単に言えば太陽系の惑星の数だけあるってことだな」

「惑星の数!？」

「ああ。惑星によってロンギヌスの槍の色も違う。これは海王星のものだ」

「なぜそれだけ!？」

「太陽系の惑星全てに生命体は存在する。つまりその始祖たる生命

体も存在することになる。俺はその始祖を倒した。元々のロンギヌスの槍の使用目的は始祖が暴走し、その惑星が危険になったときにそれを止めるためのものだった。つまり、始祖を封印するための存在ということになる。しかし槍の所有権は常にその始祖にある。その始祖に認められたものでしか使用する事は出来ない」

「じゃあ君は認められたってことか？」

「言ったら、始祖を殺したって。始祖を殺すことで無理やり所有権を得たのさ。つまり俺は神になったんだ。そして神の中にも位がある。俺はもっと高みに行きたい」

「それでエヴァのコアにあるアダムの魂と融合したわけか」「俺はアダムから生まれた使徒でなければリリスから生まれた使徒でもない。俺は殺した始祖から生まれた」

「なら僕は全力で君を止めなきゃいけない」

「出来るかな？リリンとしてまだ覚醒してない君に」

アギエルはロンギヌスの槍を二又にして初号機に接近した。予想以上に速い動きに本能的に反応してしまう。

キィーン！！

A・T・フィールドを二体の間に、正確にはアギエルの進路を阻むように展開した。アギエルはもろに受けるが、A・T・フィールドに向けてロンギヌスの槍を突き立てると見る見るうちにA・T・フィールドが消失、そしてロンギヌスの槍を素早く初号機に向けて投擲した。

「・・・！」

瞬時にA・T・フィールドを展開して防ぐ。しかし勢いは削がれることなく徐々に消失されていく。

「くううう！」

A・T・フィールドが消失し切った瞬間にマボログ・E・ソードを眼下にかざし、ロンギヌスの槍を受け止めた。アギエルは素早く初号機まで接近するとロンギヌスの槍を掴み、引き抜くと同時に蹴りを加えた。

「チッ！」

初号機はもろに受けてビルに叩きつけられた。衝撃がシンジを襲う。

「クッ・・・」

初号機が再び体制を立て直し、アギエルの姿を確認する。しかし、そこで終わった。

「なっ・・・、動かない！？」

アギエルはA・T・フィールドの翼を展開、その後、翼から放たれる光を初号機に当てていた。

「この光は浴びた物体の動きを止める効果がある」

そしてロンギヌスの槍を二又から素槍にすると投擲した。初号機は

A・T・フィールドを展開するが効果もなく、初号機の左目に突き刺さった。

「ぐあああつ!!」

左目を押さえるシンジ。

「頭部損傷!!。回路断裂!」

「全神経接続解除!」

「ダメです。信号受け付けません!」

「何ですって!?!」

エヴァの修理をしているためケイジ内で待機している三人もその光景を見ていた。

ロンギヌスの槍が刺さった瞬間に力無く腕を垂らせ、仰け反っている初号機がいた。

「シンジ!!」

「くっそおお、ワイらはなにしとんをや!。チクショウ!!」

「シンジ・・・!」

シンジは痛みには耐えながら前を向いた。左目は流血している。シンジはカシャカシャと操縦桿を引いたり押したりするが反応はない。アギエルはプログレッシブナイフを装備すると初号機に接近して右肩を切り落とした。

「くううう！」

苦痛により身をよじるシンジ。

僕はまだ死ねない。マナやみんながいる。まだ死ぬわけには……。

「僕はまだ！、死ぬわけにはいかない！。動いてくれ！」

その声に反応するかのように初号機の目に灯がともった。

「グオオオ……！」

初号機が雄叫びをあげて立ち上がった。

「エヴァ、再起動！」

「まさか、暴走！？」

アギエルは瞬時にロングヌスの槍を回収すると距離をとった。

「まさか暴走するとはな……。シンジ、もしかしたら認められし者なのか、神に……。」

初号機は膝を落とし、アギエルに向かって直線的にジャンプして蹴りを加えた。

「くっ……！」

アギエルはA・T・フィールドを展開してその蹴りを防ぐ。初号機は回転ジャンプをして距離をとると切り落とされた右腕を傷口につ

ける。すると見事に傷が治った。

「チッ！」

アギエルはファルザーを展開して初号機を攻撃した。

「ハアアア！」

初号機はマボログ・E・ソードを媒介にしてA・T・フィールドを取り込むとA・T・フィールドを飛ばした。瞬時にファルザーが破壊されていく。

「なっ！」

その後手を振り下ろすとA・T・フィールドが千本のように飛んでいく。アギエルはジャンプしてかわした。

「グオオオ！」

初号機が雄叫びをあげて手を前にかざした。すると・・・

「セントラル・マグナから初号機に向かって上昇する物体反応あり！」

「何だって！？！」

「まさか、シンジが選ばれたものに！？！」

「ああ、そうだろうな」

そして初号機の眼下にロンギヌスの槍が出現した。

「君もとうとう選ばれし者になったか・・・」

アギエルはロンギヌスの槍を構え、接近した。初号機はロンギヌスの槍とマボログ・E・ソードを持って接近する。

「ハアアア！」

初号機はマボログ・E・ソードをアギエルに向けてふった。しかしA・T・フィールドによって防がれる。

「・・・！」

アギエルは瞬時にロンギヌスの槍でマボログ・E・ソードを受け止める。マボログ・E・ソードにA・T・フィールドを流し込んでいた。その瞬間に初号機はロンギヌスの槍をアギエルのコアに突き立てた。

「ぐっ・・・！」

「君とは別の出会いだったら友達になれたかもしれないね」

シンジは涙を浮かべながら言った。

「ふっ・・・。そうだな、アンタとは友達でいたかった。・・・じやあな」

その瞬間、アギエルは爆発した。

「・・・ハクオウ」

シンジは自分の手で倒した名前をいつまでも呟いていた。

次回予告

ついに第漆使徒を倒したシンジ。だがシンジが負った心の傷は深かった。その傷をいやすかのようにマナは接するようになる。

そしてせまる第捌使徒。シンジ達はどう対応するのか。

そしてついに動き始める人類補完計画の首謀組織。

次回 ANOTHER world 第漆話 心の壁

さあて、この次もサービス、サービスウウ!!

第漆話 心の壁（前書き）

ネタがまとまらない・・・。よくわかんなくなっているけどごめんなさい。

第漆話 心の壁

「この事態をどうするかね？」

真っ暗な広い空間に低い老人のような声が響いた。その空間には十二ものモノリスのようなものが浮かぶ。

「左様。アギエルが予定よりも早く殲滅された。」

「同時にタブリスの裏切り」

「我等にとっては予定外のことだ。」

「その他にも、これは重大な事だ。碇ゲンドウとユイが組織から抜けた」

「なんだと！」

周りにざわめきが走る。

「なんと！。それでは・・・」

「そうだ。エヴァンゲリオンとそれに関する物、挙げ句の果てには・・・」

「第壱使徒アダムと第貳使徒リリス、ロンギヌスの槍もゲンドウの手に渡った。」

「それではリリスによる補完も実行できない」

「それでかねてからの計画通りに量産型の生産に着手する」

「予定よりも早い仕方がない」

「うむ、今は計画の修正に入るときだ」

「それでは各自もよろしくお願いしますよ」

「全ては補完のために」

そしてモノリスが消えていった。

「碇君、大丈夫かしら？」

「ずっと、ああだもんな」

アギエルを倒して3ヶ月がたった。シンジは元気がない。

「ああもう！、シャキツとしなさい！」

アスカがバンと背中をたたいた。

「アスカ・・・」

「いつまでも辛気くさい顔しない！。あんたはこの街と人類を守ったんだから胸を張りなさい！」

アスカはシンジの状態を良くしようと色々と考えをこらす。マナは

まだ熱が下がっておらず、家にいた。

「でも・・・ほかに方法があったと・・・」

「方法なんてどこにもなかったわ。彼はもうエヴァと融合してたんだもの」

綾波も励ましに入る。しかしシンジはいっこうに変わらない。

「うん・・・」

結局シンジはそのまま変わらずに帰った。

「どうしようかね」

「マナに何とかしてもらえないわね」

アスカは携帯をとるとマナに電話をした。

「もしもし、マナ？。そうアスカよ。ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

マナはそのお願いを聞いた。

「分かったわ。それは私も感じてたことよ」

「お願いね。彼女として」

「ハイハイ」

そうして電話は切れた。

「シンジ……。思い詰めてるのね」

翌日……

「シンジ〜!」

今日は日曜日だ。マナも風邪を治してシンジという。

「……。何……。?」

これはヤバイ。相当なダメージを受けている。確かに仲間だった人を殺したらダメージは残るわよね……。

「なあに落ち込んでるよの。今日は久しぶりのデートなのよ!」

とは言っても半ば強引に取り付けたデートだ。シンジは心の傷を負っていてあまり乗り気ではない。

「行くわよ!」

マナはシンジの手を引いて駆け出した。

「着いたわよ!」

最初に来た場所は国立自然公園だ。セカンドインパクト後もその影響を受けずに残った数少ない場所だ。

マナはシンジの手を引いて動物達と遊んだ。

「アハハ！。カーワイイ！」

マナはリス達や鳥達を周りに連れて楽しそうだ。

「・・・」

「シンジ、かわいいわよ」

シンジにリスや鳥を見せるが興味を示さない。そこにマナはウサギを連れてきた。

「ねえシンジ、ウサギってねひとりぼっちで過ごしてくと寂しくな
って死んじゃうんだって」

「・・・知ってるよ・・・」

「シンジはひとりぼっちだね。今・・・」

「・・・」

「自ら心の壁を作っちゃだめだよ。そうしたらいつかだめになっ
ちゃう」

「いいんだよ。僕は友達を殺した。そんな人間なんて生きている資
格なんて無いんだ・・・」

「シンジ！」

マナは急に怒鳴った。周りの動物も驚く。

「何でそんなこと言うのよ！。シンジのおかげでどれだけの命が救

われたと思ってるの!？」

「・・・僕はそんなつもりで戦っている訳じゃない」

マナはため息をついた。

こんなことを言うシンジではないことをマナは知っている。だから余計に心が痛いのだ。

「シンジ・・・、ちょっとこっちきて」

マナがシンジを連れて行った場所は自然公園内にあるミュージックホールだった。

「シンジ、ここに座って」

シンジは椅子に座らせられた。マナはステージの真ん中に用意されたピアノに座る。近くにはチェロとヴァイオリンも用意してあった。

「今から曲を弾きます。疲れてるみたいだしね、シンジ」

そうしてマナは鍵盤を叩いた。

「この曲は・・・」

マナが弾いた曲はenergy flowだった。マナがシンジの誕生日に弾いてくれた曲だった。

「・・・はぁ・・・」

心にしみる曲だと元々シンジは感じていた。いつの間にか目をつむ

って聞いているシンジ。
そしてenergy flowが終わった。

「マナ・・・」

しかしマナの指は止まらず、次の曲を弾いた。

「今日はメドレーよ」

戦場のクリスマスを次は弾いた。

「・・・」

シンジはもう黙って聞いていた。惚れ惚れする音色だなとシンジは感じていた。マナは昔からピアノが上手かったからなあ。

そして戦場のクリスマスが終わった。

「どう、少しはよくなった？」

「うん・・・、最高にね」

シンジはそう言うのとステージに上がり、チェロを手にとった。

「マナ、つきあってくれるかい？」

「もちろん！」

そうして館内にはチェロとピアノの音色が響いた。

この曲はマナとシンジでつくった曲だ。名前はonly life。

マナとシンジは時間を忘れて弾き続けた。

「よくなった？」

「うん。ごめんね、過ぎたことでくよくよしてたね」

「ホントよ。暗いシンジは見ててこっちまで暗くなっちゃう。それじゃあシンジらしくないよ」

「そうだね。僕達は前に進むしかないんだ。たとえば、友を殺すようなことがあっても」

「そうね」

「今日は本当にありがとう。おかげで気分が晴れた」

「どういたしまして。じゃあ、帰ろうか」

「そうだね」

そうして二人は帰った。手をしっかりと握って・・・。

そして翌日・・・

「おはよう、みんな」

「おっ、シンジが元に戻った」

「今まで迷惑かけてごめん。でももう大丈夫」

「まったく、心配させやがって」

こうしていつもの日常に戻った。

そして三時間目のとき・・・

ウウウン・・・

「緊急召集か!？」

「来たな、使徒が」

そして「ネルフ」では・・・

「またか・・・。神に認められしものか」

モニターには人型の格好をした使徒が立っていた。

「第捌使徒、ガブリエル・・・」

「シンジ君たちは？」

「本部内にてプラグスーツを着用しています」

「初号機を発進させろ。他の機体はバックアップだ」

「・・・分かりました。エヴァ、発進!!」

発進されるエヴァ。初号機はパレットライフルを装備していた。弐号機は陽電子砲、参号機はスナイパーライフル、肆号機と伍号機はB型装備でポジットロン・スナイパー・ライフルを装備していた。

「あれが第捌使徒・・・」

ガブリエルは初号機の姿を認めると、左の甲にマウンドされたところから光の剣を出力した。

「・・・!？」

さらにガブリエルは右の掌からビームを発した。初号機はA・T・フィールドを展開して防ぐ。そして初号機はパレットライフルを放った。しかし、ガブリエルは背中の翼で身を包み、防いだ。

「何なんだ、あいつ？」

「・・・来る！」

ガブリエルは翼をはためかせ風を起こすと一気に初号機の後方にいる零号機に迫った。

「逃げて！」

そう言いながら陽電子砲の引き金を引く弐号機。ガブリエルは翼を大きく広げると、その陽電子砲を跳ね返した。

「なっ・・・！」

弐号機はA・T・フィールドを展開して防ぐ。しかし眼下にはもう

ガブリエルが迫っていた。

「こんのおお！」

式号機はプログレッシブナイフを装備して、ガブリエルに突き立てた。しかしそれはA・T・フィールドによって阻止され、逆に左手の光の剣で胸部を突かれた。

「キヤヤア！」

突き刺したところの部位からは血管を思わせる模様が浮き出ている。

「浸食型か！」

伍号機がすぐさまポジトロン・スナイパー・ライフルを放つ。ガブリエルは陽電子砲と同じようにそれを跳ね返す。

「ちっ！」

伍号機はポジトロン・スナイパー・ライフルを破棄すると、プログレッシブナイフでガブリエルに迫った。参号機も陽電子砲を破棄し、プログレッシブナイフで応戦する。

その時、ガブリエルが動いた。

翼を大きく展開して可視波状の光を出した。

「なにこれ！？」

「アンチA・T・フィールドを可視光線化したものです」

「心理グラフ乱れていきます。精神汚染、始まります！」

「キャヤア！」

すでに零号機、弐号機、参号機がダメージを被っていた。

「やめて、私の心を覗かないで!!」

「この・・・やめい、やめてくれ!!」

「く・・・ううう」

「精神汚染レベルレッド！危険です！」

「機体回収急いで！」

「ダメです！。弐号機、すでに40%同化しています！」

「何ですって！？。アスカ・・・！」

弐号機はすでにほぼ全身に血管のような模様がついていた。

「あ・・・あ・・・」

「アスカ！」

伍号機がパレットライフルでガブリエルを狙う。しかしガブリエルのA・T・フィールドでそれは防がれた。

「ハアア！」

と、そこに初号機が接近した。

「シンジ君、なにを・・・」

初号機は腰に装備していた短刀をもつとそれを槍の形にした。

「ロンギヌスの槍か!？」

初号機はロンギヌスの槍をそのままガブリエルに突き立てた。

「ぐう!」

そうしてガブリエルは爆発した・・・。

次回予告

使徒の侵食攻撃にやられたアスカは心に深い傷を負う。

それによって作戦を帰らざるを得なくなったミサト。

そうして接近する第玖使徒。

いったいこれからどうなってしまうのか。

次回、ANOTHER world アスカ、心の傷を

次回もお楽しみにね!

第捌話 アスカ、心の傷を（前書き）

わけわからなくなっ
てごめんなさい

第捌話 アスカ、心の傷を

見事第捌使徒をたおしたシンジ達。しかし、その代償は大きかった。

「アスカ・・・」

アスカは第捌使徒による侵食攻撃により今は病院で治療を受けている。

第捌使徒との直接的侵食によってアスカの精神状態は今までになく悪い状態だった。

「今はまだそつとしておいた方がいいな」

病室のドアから中の様子を見ている人影が一つ。カヲルだ。カヲルはアスカの姿を認めると病室から一人、去っていった。

「・・・ロンギヌスの槍か・・・」

第捌使徒の殲滅は「ネルフ」にまた新たな物を与えた。

ロンギヌスの槍だ。第捌使徒はロンギヌスの槍を持っていたのである。その色は緑色をしていた。

「これで初号機の扱えるロンギヌスの槍は三つか・・・」

「しかし、初号機だけがロンギヌスの槍を使えると言うことは他のエヴァにもそれ相当の武器を与えないと対応しきれん。今回みたいにな・・・」

「その件は問題無い。今、全力でロンギヌスの槍のコピーを作っている」

「まさか、委員会と同じ手に出るのか!？」

「同じものを持っていないければ対応しきれん。私達はサードインパクトを防ぐためにここにいる」

「しかし、何をコピーするのだ?。全てというわけにはいかないだろう」

「各エヴァには形状変形して三本武装してもらう予定だ。もちろんA・T・フィールドを貫けるようにしてある。その他にも全ての遠距離武器にその技術を組み込む予定だ」

「なるほど。それで完了の目処は?」

「3ヶ月だな」

「分かった」

一方葛城邸では・・・

「アスカはいないけど、これから大事な話をするわ。後で教えってね」

第捌使徒との戦闘から今後の基本戦闘の変更に関する話し合いだ。

「今後の事なんだけどこれからはツーマンセルで行動してもらうことになるわ」

「ツーマンセルうう？」

「そ！。今回はエヴァ全機出撃はこちらの作戦ミスね。武装も遠距離武器が多かったし・・・」

「てことは常時決まったパートナーと一緒に使徒を迎撃するってこと？」

レイが首を傾げながら言う。

「御名答！。つまり、最初から最後までワンペアでいることもありってことよ」

「分かりました。それで・・・」

一通りの会話が終わると今度はペアの組み合わせについて話した。僕とマナ、アスカとカヲル、レイとトウジというペアになった。

「ちょっとカヲル君、来てくれる？」

みんなが帰った後にカヲルがミサトに呼ばれた。

「何でしょうか？」

「アスカのことなんだけど・・・」

カヲルは一瞬ドキッとしたが相手に伝わらないようにして話を聞いた。

「アスカは今第捌使徒の侵食攻撃及び精神汚染によってよい状態ではないわ。そこで、使徒であつたあなたに何かわからないかと思つて」

「すみません。使徒の攻撃を見て侵食型と分かつただけで人間に作用する使徒の侵食攻撃はよくわからないんです。ただ、可視波状の光による精神汚染攻撃についてはA・T・フィールドでは防げないことだけが分かっています」

その時、ミサトの携帯に電話がかかった。

「もしもし、ミサトです。あつ日向君！・・・分かつたわ。すぐいく！」

「・・・使徒ですか」

「そうよ。予想より早かつたわね。すぐにみんなに伝えて！」

カヲルは首を縦に振ると駆け出した。

第壱作戦室では・・・

「使徒確認。モニターに出します」

モニターに出された映像にはロンギヌスの槍と盾が浮いていた。

「変わつてるわね。肉体はないの？」

「いえ、攻撃をするときのみ肉体は現れます。しかしそれ以外では確認できません」

「なるほどねえ……。エヴァ初号機と肆号機を準備して。パイロットは？」

「すでにエントリープラグ内にて準備しております」

エヴァ初号機と肆号機はすでにエントリーカタパルトにセットされていた。

「エヴァ、発進！」

地上に出される初号機と肆号機。初号機はパレットライフル、肆号機はディアルソーを装備していた。

「これより第玖使徒はアルカディアと呼称します。気をつけてね、シンジ君、マナちゃん」

シンジとマナはこくつと首を縦に振るとアルカディアに向き直った。アルカディアは一向に行動を起こさない。初号機がパレットライフルを放ったときも通り抜けてしまうため効果はなかった。しかし、肆号機がディアルソーを構えなおしたとき……

「……！」

肆号機の眼下に突如アルカディアが出現、ロンギヌスの槍を剣に変えて肆号機に迫った。

「くっ……」

肆号機はディアルソーで剣を受け止める。初号機はその攻撃の最中

にアルカディアの肉体を認めるとパレットライフルを放った。

ガガガッ！！

アルカディアはA・T・フィールドを展開せずにもろにそれをくろう。しかし効果は全くなかった。

「なんで！？」

初号機はパレットライフルは無意味と判断すると左肩のラックからプログレッシブナイフを取り出すとアルカディアに接近した。

「ハアアア！！」

しかしアルカディアは盾を初号機に向けてかざすとそれが急に光を発し初号機を吹き飛ばした。

「なっ・・・！？」

「イージスの盾か・・・」

さらに攻撃を続けるアルカディア。

肆号機はディアルソーで剣を押し返すと素早くプログレッシブナイフを取り出し、アルカディアに向かって投げた。しかしそれも空を切り裂き、効果を得られない。

とっさに距離を取った肆号機。

「・・・！？」

アルカディアはその行動を確認すると急に腕を伸ばし、肆号機の首をつかんだ。

「ぐっ・・・！」

肆号機は苦しみながらもディアルソーで腕があらう場所に振る。だがそれは空を切り裂いた。

「マナ！」

初号機は肆号機の状態を確認すると手を左から右になぐように振った。するとその軌跡をたどるかのようになりA・T・フィールドが展開され、アルカディアの腕を切り裂いた。

「ふう・・・」

肆号機は素早くまた距離を取った。

「・・・出血しない!？」

使徒であろうと生物は生物である。出血しないのはおかしい。

「まさか、あの肉体は見せかけ!？」

ならば合点がいく。見せかけの肉体ならばディアルソーやプログレッシブナイフが空を切り裂くのは当たり前だ。

「ってことはコアもどこかにあるってことね」

「うん。そうだね」

アルカディアは何事もなかったかのように接近する。シンジ達は防御態勢をとった。

「・・・!?」

アルカディアの剣が急に光り出すとそれを振った。すると光の剣が飛んできた。初号機はA・T・フィールドを展開して受け止めた。

「・・・マナ！」

とつたに肆号機を突き飛ばした初号機。すると光の剣は初号機のA・T・フィールドを破り、初号機を貫いてさっきまで肆号機がいた場所を通り過ぎた。

「ぐあっ！」

激痛に耐えるシンジ。

「シンジっ！」

肆号機はディアルソーを構えて初号機の前に出た。

「やめろ！」

初号機が肆号機の手を引く。同時にアルカディアはまた光の剣を放った。今度はプログレッシブナイフで受け止める。

「くううっ！」

光の剣をそらすことに成功した。しかし、プログレッシブナイフは破壊された。

「キャア！」

「マナっ!？」

アルカディアは初号機が光の剣を受け止めているうちに肆号機に接近、剣を突き立てた。肆号機はA・T・フィールドで受け止めたが、剣がロンギヌスの槍に変化。A・T・フィールドを破り肆号機の胸部に突き刺さった。

「ぐっ・・・くう・・・」

ロンギヌスの槍は肆号機の胸部を貫通し、アンビリカルケーブルを切断していた。

「肆号機、活動限界時間残り五分！」

「まずい！」

「こんのおお！」

初号機がすかさずアルカディアに接近する。しかしイージスの盾によって突き飛ばされた。

「・・・つの、ふざけるなあ!!」

その瞬間にシンジのなかに何かが脈打った。

「ハアアア!!」

初号機がシンジの雄叫びとともに立ち上がると腰にマウンドした短刀を装備するとそれをロンギヌスの槍に変化させた。

「てええい！」

ロンギヌスの槍を二又にするとアルカディアに向けて突き立てた。アルカディアはイージスの盾を前に出したがそれはロンギヌスの槍によって破壊された。その勢いで肆号機のそばまで駆け寄ると突き刺さっていたロンギヌスの槍を抜き取った。

「マナ、大丈夫か!？」

シンジがマナに問いかけるが全く反応がない。

「ミサトさん!。肆号機の回収を！」

シンジの呼びかけにミサトは首を縦に振る。

「肆号機の回収急いで！」

初号機は肆号機が回収されるのを確認するとアルカディアに向き合った。

アルカディアはロンギヌスの槍を構えているように見える。

初号機はロンギヌスの槍の両端を二又にするとそこから光の球体を出した。アルカディアはその行動を確認するとロンギヌスの槍を投擲した。だがそれはまるで見えない壁に遮られるかのように止められた。

「A・T・フィールドなの!？」

「いえ、違います!。解析不能!」

初号機は光の球体をロンギヌスの槍の中心に重ねると光がアルカディアに向かった。そしてアルカディアのコアが露わになった。

「ええい!」

初号機がコアに向けてロンギヌスの槍を投擲した。アルカディアはA・T・フィールドで受け止めるがロンギヌスの槍の勢いはそがれずそのままコアを貫かれた。

そのままアルカディアは爆散した・・・。

次回予告

第玖使徒を殲滅したシンジたち。次の使徒は恐るべきものだった。

それに対応すべく作戦を立てるミサト。果たして成功するのか。

次回 A N O T H E R w o r d 第玖話 奇跡

さてこの次もサービスサービスウウ

第玖話 奇跡（前書き）

本編に話を戻しました

第玖話 奇跡

第玖使徒を倒したシンジ達。しかし第玖使徒はシンジ達に大きな損害を残した。

エヴァ零、参、肆号機の大破。それに伴う第参東京市の損傷。今使徒に攻められてはまずい状況だった。

「全く、エヴァ三機の大破及び第参東京市の損傷。国が一つ傾くよ」

「しかし第漆から第玖までの使徒は裏死海文書には存在しなかった。どうということだ、碇ゲンドウ、ユイ」

「全く見当がつきません」

ゲンドウが多数のモノリスに語りかけるように言う。

「だがその使徒は全て神に認められし者だ」

「すでに四本ものロンギヌスの槍を所持しているではないか」

「それらはエヴァという存在に引き寄せられたと考えます」

「うむ、よくわからんが仕方がない」

「取りあえず君たちを呼んだのはこのことではない」

「・・・」

場所を移し学校・・・

「アスカ、大丈夫なの？」

シンジは学校に着いたとたんにヒカリからの質問責めにあっていた。

「彼女は大丈夫だよ。心配ない」

いつの間にかカヲル君が来ていた。

「そう、ならいいわ」

そうしてヒカリは自分の席へと行った。

「今アスカの状況を話すのもやばいだろ」

「わかってるよ。心配しないで」

そうして僕らは一日を過ごした。

「アスカ、まだ治りませんね」

「仕方ないわ。あそこまでやられたら誰だってこうなるわよ」

「毎日見舞いに来てるカヲル君もかわいそうですね」

リツコとマヤの目線には病室でベットに横になって医療器具を付けて眠っているアスカと、いすに座りヴァイオリンを弾くカヲルがう

つっていた。

病室にはヴァイオリンの音色が二人を包み込むように流れていた・・。

そうして1ヶ月・・。

アスカの容体も回復し、エヴァ三機の修復も完了した。

「アスカ、大丈夫？」

レイが心配して言う。

「大丈夫よ！。心配しないで」

「でもこれで準備が整ったわね。実はもうすでに使徒は現れていたの」

「はあ！？。でも見えないじゃない。どこにいるのよ！」

「宇宙空間にいるわ」

その言葉と同時にモニターが開き、画面には中心部には眼のような模様がつき、その左右には手のようなものがついている不気味な姿が現れた。

「なにこれ、気持ちわるーい！」

レイが叫ぶ。周りのみんなもそれに便乗して言い合う。

「この使徒は第拾使徒、サハクイエルと呼称します」

ミサトが言う。

「目標は体の一部を切り離し、引力とA・T・フィールドを利用して破壊力強化、そして本部を攻撃するといったものです」

「今までの経過を見ると、初弾は大はずれ、しかし第二、第三弾は誤差修正をして確実に狙ってきています」

「次は確実に来るわね」

「そうね、今度は本体ごと」

ミサトとリツコは言った。

「でもそんな馬鹿でかいものはどうするんですか!？」

マナが言う。確かにそうだ。体の一部を切り離してあんなに広範囲を攻撃できるんだ。ましてや本体だなんてどうすればいいんだろう。

「マギがリアルタイムでエヴァに予想ポイントを送るわ。みんなはそれに従って動いてもらうの」

「エヴァ全機はマギのはじめの指示を受けた後にアンビリカルケールを切断し、ポイントに走ってもらい、一機でも間に合ったらA・T・フィールド全開で受け止めてもらうわ。その後はコアをすぐにアタックしてちょうだい」

「もし間に合わなかったら？」

シンジが言う。

「その時はさようならね」

ミサトが笑って言う。

「まさに奇跡やなあ。出来たら」

「奇跡は起こしてみても初めて奇跡なのよ」

「そうよ、始める前からそんなこと言ってちゃだめよ」

アスカがすかさずつつこむ。

「やってみる価値はあるね」

カヲルが柔らかくほほえみつぶやく。

「これから十八時間後に作戦を開始します。それまではゆっくりしていいわよ」

そうしてみんなは作戦室から出た。

作戦室から出てトウジは病院に行った。第参使徒の時に妹が怪我したのだ。

妹の病室に向かう廊下ですでに病室の前にいる人物がいた。

「あれ、いいんちよやないか」

「あつ、トウジ・・・」

ヒカリはバックとフルーツバスケットを手にしていた。

「どないしたんや、ようここがわかったやないか」

「うん、妹さんの病室看護士さんに聞いたんだ」

トウジは病室のドアを開けてヒカリを招く。日の当たるところに医療器具をつけたトウジの妹がベットに横になって眠っていた。

「しかしどんな用や。妹に」

ヒカリはドキツとしてトウジを見たがすぐに顔を逸らして言った。
「ずっと入院してるって聞いたから心配で」

「ふーん……、誰に聞いたんや？」

「えっ、あつ……、い、碇君……」

ヒカリはすでに顔を赤らめている。

「……。関心せえへんなあ。嘘はいかんで、嘘は」

「えっ……!？」

ヒカリはトウジの顔を見返した。

「妹がここで入院しとるのを知っとるのは病院の人達と限られた人達だけや。もちろん、シンジには教えてない。だからいいんちよが言ったのは嘘や」

ヒカリはさらに急激に顔が赤くなってしまい下をむいてしまった。

「ほんととはなににきたんや。言うてみい」

トウジの滅多に見せない優しい声を聞き、つい安心して本音を出してしまった。

「トウジに・・・会いに来たの」

「わしにか？」

ヒカリはとんでもないことを言ってしまったというような顔で口を押さえ、小さくなってしまった。

「学校でもいつでもワシにはあえるんになあ」

トウジはそう言いながらヒカリの目の前にきて顔をのぞき込んだ。ヒカリはすでに涙目をしていた。

「まあ、わかつとつかがな、おまえの気持ち」

「えっ・・・!？」

ヒカリは涙目でトウジを見た。

「最近ワシに弁当作ってくれるようになったやろ。そっから感ずいとったんだか勘違いやったらダサくてしょうがないからちと観察しとったんや。そしたら案の定これや」

ヒカリは恥ずかしいといった表情でまた下を向いた。

トウジはカーテンをしめるとまたヒカリの前に立った。

「お前の気持ちはよう分かった。女を泣かすのは俺の趣味やないからなあ・・・」

するとトウジはヒカ리를抱き寄せた。

「・・・！」

ヒカ리는突然の行動に驚いたがゆっくりと両腕をトウジの背中にまわした。その光景はまるで互いが必要であるかのようにいつまでも寄り添っていた。

そして作戦時間になった。

「それではやってもらおうわよ」

今回のケースはツーマンセルを解体し、個人での行動となる。零号機、初号機、肆号機は標準装備、貳号機はソニックブレイヴ、参号機はディアルソー、伍号機はマステマを装備した。

指定ポイントに到着し、静かに待つエヴァ。

「ああっ、もう、焦れたいわね！」

「・・・」

「緊張すんなあ」

「まだなの・・・？」

「いや・・・、来る！」

その時、司令室にはアラームがなった。

「使徒確認！。落ちてきます」

「来たわね。マギの落下予想範囲、送って！」

「了解！」

シンジ達にはマギの落下予想範囲が送られる。

「なっ、ばっかじゃないの、広すぎるわよ！」

「いくよ、アンビリカルケーブル切断！」

エヴァのアンビリカルケーブルが切断され、走っていく。
時間がたつにつれ、落下予想範囲も狭まってくる。

「一番近いエヴァは・・・」

「ワシや！」

参号機が猛スピードで走っていく。
そしてついに・・・

「A・T・フィールド展開！」

参号機が見事サハクィエルを受け止めた。

「ぐっ、この！」

しかし受け止め続けるのも容易ではない。参号機の足場は埋もれかけていた。

「トウジ！」

伍号機と初号機が素早く駆け寄りA・T・フィールドを展開する。すると、サハクイエルが少しだけ押し返された。

「A・T・フィールド、展開！」

すぐさま肆号機がA・T・フィールドを展開して中和する。そこに零号機がA・T・フィールドに切れ目を入れた。

「もらったあ！」

式号機が最後に走り込んできて真っ直ぐソニックブレイヴをサハクイエルのコアに突き刺した。

その後サハクイエルのA・T・フィールドは消滅し、爆発した。

第拾使徒の殲滅に成功した。

次回予告

無事第拾使徒を倒したシンジ達。

少年達は戦いの間の微かな休息を得る。

少年達はどのような思いを語るのか。

次回、A N O T H E R w o r l d 第拾話

夜空の下で

さあて、この次もサービス、サービスウウー！！

第拾話 夜空の下で（前書き）

ちよつとばかり休憩です。

第拾話 夜空の下で

「はああ、やっと終わったわ」

ミサトとリツコ、それとマヤはエヴァンゲリオン零号機から肆号機まで伍号機と同じく、S2機関とファルザーを追加装備としてこの三ヶ月間作業してきた。

「これで戦いやすくなるわね」

「ええ、彼らにはこれからもがんばってもらわなくては」

同時刻、学校・・・

「いよいよ、いよいよやって来た!!」

「待ちに待った球技大会!」

そう、今日は球技大会だったのである。

「今日はいいとこみせてやる!」

「勝つぞー!」

この学校では学年関係なしにトーナメント方式で戦う球技大会だ。シンジ、トウジ、ケンスケ、カヲル、クラスはバスケットに、アスカ、レイ、マナはフットサルに出場した。

「負けちゃだめよ」

レイがシンジに言う。

「当たり前だよ。試合、重なってないから見に行くよ」

「ありがと。じゃあお互いがんばりましょう！」

そう言って互いに分かれていった。

シンジたちは一試合目だった。体育館に向かい、アップをすませる。相手はバリバリ現役の三年だった。

「流石やなあ。やっぱ三年もやつとると動きがちゃうのう」

「そうだね。でも、こっちだって負けてられないよ」

トウジが言ったことにケンスケが答える。既に試合前三分になっていた。

「じゃあ始めるよ。みんな集中してね」

シンジがみんなに呼びかける。

そしてホイッスルが鳴った。

相手は三年。だが、こっちにも分がある・・・

コートに入り試合開始。勿論ジャンプボールからである。ジャンプボールは三年が制し、パスをまわす。そしてコーナーにボールがまわったとき・・・。

「もらった!」

コーナーからスリーポイントをうとうとしたがそれはケンスケによって阻止された。

「アマイよ。そう簡単に打たせる訳ないでしょ」

ボールを回収するとすぐさまシンジにボールを渡す。シンジはドリブルを開始してフロントコートに突っ込んだ。

「行かせるか!」

三年が目の前に立ちはいなかったがシンジはそれを華麗に交わして見せた。

「なんだと!?!」

残りゴール下にいる奴のみ。シンジは構わず突っ込む。

「馬鹿め!」

残り一人の奴がシンジにアタックを仕掛けたが横からきたトウジにパスを出しシュートを決めさせた。

「おっしやあ!」

この調子で勝ち進み、シンジ達のチームは優勝した。アスカのチームも優勝したみたいだった。

そして夜・・・

「今日は疲れたわね」

アスカがいかにも疲れ果てた声で言う。

「そうねえ。でもシンちゃんの格好いいところみれたから良かったわ」

レイが本音を言う。

「とっちゃだめよ!」

すかさずマナが言う。

「冗談よ!」

レイは怒らせないようにと付け足しをする。

「でもさあ」

「なに?」

シンジが言ったことにれい、アスカ、マナが反応する。

「なんで使徒って攻めてくるのかな?」

「なんでって、サードインパクトをおこすためでしょうが」

アスカがすかさずつつこみを入れる。

「どうしてだろうね」

マナが言う。

「人類はどちらか一方しかいきることはできない。双方が生存とは決して出来ないものなのさ」

急に後ろからカヲルがきた。

「じゃあ死なないために彼らは攻めてくるの？」

「ああ。僕がそうであつたようにね」

レイの問いにカヲルが答える。

「僕は人間として生きることにしたからね。こうして生きることが出来るのさ」

「みんな生きるために必死なんだね」

シンジが行ったことに一同が感じる。

そして夜が深まるまで彼らは話したのであつた。

次回予告

遂に追加装備されたエヴァンゲリオン。その実験をすべく実験が開
始される。その時忍び寄る使徒とは。

次回 ANOTHER world 第拾壱話 使徒介入

第拾巻話 使徒介入（前書き）

久しぶりです

第拾巻話 使徒介入

球技大会が終わってから三日後、エヴァの新装備を試すため、エヴァ六機とそのパイロット、作戦部長などネルフ職員は松代にきていた。

「いやあ、疲れたなあ、飛行機の中」
レイがネルフ飛行機から降りて言う。

「ここが実験施設よ」

ミサトが目の前にある建物を指さす。

「なあにあれ、野球場!？」

アスカがその建物の見た目をズバリ言い当てる。

「そういうこと言わないでとっとと入って!」

中にはいると地下に続く通路があり、そこを抜けると第参新東京市にあるジオフロントと同じものが目に入った。

「まさか他にもこんな所があるとはね」

カヲルが驚嘆しながら言った。

「ここは世界で唯一の地下戦闘実験施設。ここでは「ネルフ」に負けないくらいの設備がそろってるわ」

そうしてシンジ達、正確にはシンジがプラグスーツを着て初号機に乗る。

他のエヴァはすでに実験は終わっていた。初号機は暴走の危険があるためここ松代に場所を移してすることになっていた。他のパイロットをつれてきたのはシンジの操縦をもう一度客観的に見るためである。シンジは初号機とシンクロすると目の前のエヴァを見た。

「シンジ君、あれは仮設エヴァ漆号機よ。武装はS2機関以外全てあるわ。そのうちパイロットが決まればこの機体ともつき合うことになるわ。いまはダミープラグによって起動してるわ」

「了解。ようは内部電源を無くせばいいんでしょ」
リツコの説明を受けて要領を理解するシンジ。

「口で言うほど簡単じゃないわ。でもやってもらおうわよ」

「了解」

初号機は左肩のラックからプログレッシブナイフを装備すると漆号機に切りかかった。漆号機もプログレッシブナイフを取り出し、受け止める。

「なかなかだな・・・」

初号機はプログレッシブナイフで漆号機を弾き飛ばす。

「でもっ!」

その時司令部では・・・

「第四十七エリアのタンパク壁になにかカビ見たいのがあります」

最初の異変に気づいたのはマコトだった。

「何でしょうね、これ」

リツコが近寄って話す。

「取りあえずレーザー処理してみます。」

そしてその部位に向かってレーザーを照射した。その時レーザーがあるものによって防がれた。

「・・・っ！、A.T. フィールドの反応です！」

「パターン青、使徒です！」

「何ですって!?!」

カビだったのは実は使徒だったのだ。

その後使徒は範囲を広げ、漆号機のアンビリカルケーブルに続く配線を汚染し始めた。

「まずい、切断急いで！」

「使徒、すでにアンビリカルケーブルとエヴァの接続部位地点まで到達！」

「使徒の本体すべては今漆号機にあります。アンビリカルケーブル

を切断して使徒をこれ以上広がらないようにして！」

そして漆号機のアンビリカルケーブルが切断された。直後、シンジから連絡が入る。

「どうしたんですか、ミサトさん！」

漆号機はアンビリカルケーブルを切断したにも関わらず、内部電源の残り時間は動かなかった。

「やはり、すでに使徒に侵食されたか・・・」

「シンジ君、今現在漆号機は使徒によって侵食されたわ。よって漆号機を現時点をもって使徒とし、殲滅を最優先とします」

「使徒はイロウルと呼称します」

「了解！」

初号機は武器庫ビルからパレットライフルを装備するとイロウルに向かって撃った。

しかしそれはA・T・フィールドによって防がれる。

「くそ・・・」

A・T・フィールドで防いだイロウルは瞬時にジャンプして初号機に蹴りを加えた。

「うおおっ！」

初号機は受け身をとって体勢を立て直す。

「エヴァの身体能力が上がってる！？。やはり使徒の力か・・・」

初号機はプログレッシブナイフを構え直すとイロウルの出方を見る。

ザザッ

イロウルは初号機を再確認すると前屈みになる。

「・・・来る！！」

イロウルは初号機めがけてジャンプし、蹴りを加える。初号機はA・T・フィールドを展開してそれを防ぐ。イロウルは身を翻して着地すると今度は両手を初号機のA・T・フィールドをこじ開けるようにし自分が今度はA・T・フィールドを展開し中和し始めた。

「・・・くそっ！」

初号機は左手で自分のA・T・フィールドを支えたと右手にプログレッシブナイフを握る。そして中和された瞬間・・・

「てええい！」

初号機はイロウルの左胸辺りにプログレッシブナイフを突き立てた。

「グオオオオ！」

イロウルは叫び声をあげる。しかし初号機の右腕を逃がさないように掴むと右手を剣に変換し、初号機に突き立てた。

「・・・アアアッ！！」

シンジは激痛に耐えきれず叫び声をあげる。

「シンジ君!!」

ミサトも耐えかねて叫ぶ。

イロウルの剣が突き刺さった部分からは侵食が始まっていた。

「くそっ・・・!!」

その侵食部分は初号機の左腕にまで達し、自由がきかなくなる。シンジに対しても同様の効果が及ぶ。

初号機は腰部からファルザーを展開してイロウルを攻撃した。しかしそれらはイロウルのA・T・フィールドで全て弾かれる。

「ちっ!!」

続いて初号機は右手でイロウルを押さえると左半身を下にして寝返りをうつように回転しようとする。しかし、左足の踏ん張りがきかず失敗した。

「・・・!?!」

シンジはその時にほぼ左半身が侵食されていることに気づく。

「初号機、すでに約35%使徒との融合を果たしています!!」

マヤがそれを伝える。

「シンジ君!、機体は捨てて逃げて!!」

シンジはそれを聞くが無視し、通信回線を切る。

「・・・このっ!!」

初号機はイロウルの左胸に刺したプログレッシブナイフを抜いて一気にイロウルの右腕を切り裂いた。

「グオオオ・・・!」

イロウルは距離をとり左腕を刀にかえる。

初号機はイロウルの右腕を投げ捨てて再び突進する。

イロウルは左腕で初号機を切り裂こうとした。

「A・T・フィールド、展開!」

初号機はロンギヌスの槍を左手に持つとA・T・フィールドほど貫いた。

イロウルはコアを貫かれ爆発した・・・。

次回予告

ついに第拾式使徒イロウルを倒したシンジ達。

使徒との戦いの中でミサトは真理にたどり着き始める。

その真理を知ったとき何を思うのか。

次回 A N O T H E R
w o r l d
拾弐話
t r u t h

第拾弐話 **t r u t h** (前書き)

破が始まりました！。小説もバンバンがんばりたいと思います！！

第拾弑話 t r u t h

ミサトは薄暗い一本道を歩いていた。

セントラルドクマ、その最深部。

ミサトはマコトと自分の二人で手に入れた真実を確かめるために今扉の前にいる。ヘブンズドアと呼ばれる扉の前に。

「ここね・・・」

ミサトはカードリーダーにカードをスライドするがエラーで開かない。

と同時に背後から銃を構える音がした。

「・・・まさか本当だったとはね。加持君」

加持は銃をミサトに向け立っている。

「真実にたどり着いたかい？」

加持は銃をおろして訪ねる。

「今からそれを確かめるのよ」

「セカンドインパクトから全てを知ることになってもいいんだね？」

そう言って加地は自分のカードを読み込ませ扉を開ける。

ミサトはその風景をみて驚愕した。

「なんで、こんなところに使徒が!？」

「コイツは第貳使徒リリースだよ。ヒトの始祖たる存在だよ」

「じゃあ私たちも・・・!？」

「そう、俺達も使徒なのさ。奴らから見ればね」

「あなた達はいつたいなにをしようとしてるの!？」

「そうだな、そろそろ君も知らなくてはいけない時期か。全てを。では、君に伝えよう。全ての真実を」

そうして加持は話をはじめた。

南極で起こったセカンドインパクト。それはヒトが意図的に発生させたものだった。使徒とヒトの融合。それがセカンドインパクトの正体。

簡単に言うならばロンギヌスの槍というものを媒介にしてヒトの遺伝子と使徒を融合させて、アンチA・T・フィールドを発生させ、A・T・フィールドを消滅させて全てを始まりへと返した。

しかしセカンドインパクトが発動した時点であのままだったら全ての人間が消滅してしまう。

そこで使徒とヒトの物理的融合が果たされて、ガフの扉が開かれると同時に最先端の科学力を駆使して被害を最小限に食い止めることに成功した。だからヒトは今まだ生きている。

「・・・これがセカンドインパクトの真相ってわけね」

「ああ。そしてまだある」

セカンドインパクトに利用した使徒は第壹使徒アダム。今現在戦っ

ている使徒の始祖たる存在だ。

そしてそのアダムのコピーを使って作ったものがエヴァだ。零号機、初号機はリリスから、弐号機からはアダムから作られている。

ちなみに碇指令はこのアダムとリリスを使って人類を進化させようとしている。それが人類補完計画。

ゼーレはエヴァ全機を使って人類補完計画を遂行させようとしているがな。

「どちらにしろ人類は滅ぶってこと!？」

「その間違いに気づき、碇司令は全力でゼーレを止めようとしている」

「当たり前よ。人類が滅ぶなんてやだわ」

「だから、今やれることをしとかないとな」

加持はそう言って元来たルートを戻る。

「それと今持ってる命、大切にしろ。じゃあな」

加持はそうして見えなくなった。

「・・・当たり前よ、バカ」

葛城も加持の後を追うようにして戻った。

その夜・・・

「月が綺麗だな・・・」

カヲルが自分の家の屋根に登って月を見ていた。

「エヴァ漆号機も失ってどうなることやら・・・」

愚痴をこぼしているその時にある一条の光が走った。一般人からは綺麗な流れ星にしか見えないがカヲルには恐ろしいものに見えた。

「まさか、もしかして・・・」

カヲルが感じたことが本当になるとは本人すら感じないことだった・・・。

次回予告

今までの事を覆すかのように第拾弍使徒から第拾伍使徒が複数同時展開をする。

さらに松代で起動実験するはずのエヴァ捌号機と玖号機が第拾弍使徒と第拾肆使徒に侵食され、使徒の意志により暴走する。

これらを止めるべく出撃するエヴァだが次々と使徒の目の前で倒れる。

その時シンジが決死の覚悟をする。

次回 ANOTHER world 眠れ、安らかに

さあて、この次もサービスしやうわよん！！

第拾弐話 **t r u t h** (後書き)

この内容は自分の解釈ですのでご不満等もあるかと思いますがご了承ください。

第拾参話 眠れ、安らかに（前書き）

学生という立場上更新が不定期ですが了承してください

第拾参話 眠れ、安らかに

プルルル・・・

カヲルが部屋に入ったとき携帯が鳴りだした。

「まさか・・・な」

カヲルは携帯を開き、電話にでる。相手はミサトだった。

「なんですか？」

「使徒が現れたわ。すぐにきてちょうだい」

「分かりました。・・・くそっ！」

カヲルは電話を切るとすぐに玄関に向かい靴を履いて走る。まさか本当に予想が当たるとは・・・。

カヲルが「ネルフ」の作戦会議室に入るとすでにシンジ達が集まっていた。

「全員そろったようね。じゃあ始めるわよ」

そう言うときミサトはモニターに映像を映し出す。

「これって・・・、エヴァ？」

映像を見たレイが言った。

「ええ。あれはエヴァ捌号機だったものよ。今は第拾貳使徒レリエルによって侵食されてるけどね」

「また取り込まれたの!?!。あきれた、何やってんのよ」

アスカはものもいえないような顔をして言う。

「そう言わないの。この使徒の殲滅はアスカが担当することになるからよろしくね」

「よし!。任せなさい!!!」

「他のエヴァは別命があるまで待機ね」

その時、アラーム音が鳴り響く。

「どうしたの!?!」

ミサトが叫ぶ。

「第参新東京市飛鳥山上空から第拾参使徒、出現!」

「なんですって!?!」

「・・・なっ!?!。さらに情報、松代にて待機中のエヴァ玖号機が暴走!。第拾肆使徒に取り込まれているようです!。さらに太平洋上空衛生軌道上に第拾伍使徒出現!。」

「そんな、今までないとしてた複数同時展開!?!」

ミサトを含め、すべての人間が動揺する。

「敵は四体、エヴァは六機……。上等ね!」

ミサトは作戦を考えてシンジ達に提示した。

「いい?、アスカは同じように拾式使徒レリエルを、トウジ君は第拾肆使徒バルディエルを、レイとカヲル君は第拾伍使徒アラエルを、シンジ君とマナは第拾参使徒ゼルエルを各自目標にして殲滅してちようだい。絶対に合流させちやだめよ。いいわね?」

「了解!」

作戦を聞き終わり、各自プラグスーツに着替えエヴァに乗り込む。

「準備はいいわね!?。エヴァ、発進!」

ミサトの号令にあわせてエヴァが発進される。

「地上にでたらすぐに使徒を探して発見次第殲滅、いいわね?」

「了解!」

そしてエヴァ各機は使徒を探すべく展開した。

そして一番初めに使徒に接触したのは式号機だった。

「見つけた!」

アスカはそうつぶやいてプログレッシブナイフを装備する。レリエ

ルも式号機の姿を認めたのか取り込んだエヴァ捌号機に標準装備してあったプログレッシブナイフを装備する。

「はあああ！」

式号機がレリエルに突っ込んでプログナイフで切りつけようとする。しかしそれはレリエルのプログナイフで受け止められた。

「チッ！」

式号機はレリエルのプログナイフを跳ね上げると瞬時に懐に入り込み、右肩のウェポンラックからニードルガンを上部に展開してレリエルの左胸あたりに密着させる。

「ええい！」

アスカがトリガーをひくとニードルガンが放たれ、レリエルに突き刺さる。

「グオオオ・・・」

レリエルは式号機から離れるように吹っ飛ぶ。それを式号機はレリエルの両腕を掴んで止め、引き寄せる。

「もう一発！！」

さらに式号機はニードルガンを放ち、レリエルをふっ飛ばす。

「これでとどめっ！」

式号機は左手でコアを殴り貫こうとした。が、レリエルは突如消えた。

「なっ!？」

式号機が後ろを振り向くとレリエルはすでにそこにいた。

「瞬間移動できるなんて……。厄介ね」

式号機がプログナイフを構え、レリエルに接近する。しかし突如何かに止められたかのように前進できなくなった。

見ると式号機の右腕にあたる部分が黒い円形のものにすっぽりと飲み込まれていた。それはまるで空間を平面でスパッと切ってできたかのように存在していた。

「な、なによこれえ!!」

式号機は右腕を引きだそうとするが引き出せない。

「まさか、ディラックの海!？」

リツコが映像をみて答える。

「それじゃあ、あれって虚数空間、別の宇宙につながってるの!？」

「おそろくね。まいったわ、抜け出すの、容易じゃないわよ」

リツコが言う。

レリエルは式号機を不完全ながら捕らえると一気に攻撃をたたき込んだ。

式号機はそれをA・Tフィールドを展開して防ぐ。が、レリエルは徐々に式号機のA・Tフィールドを浸食し始める。

「くっ・・・！」

アスカはさらに力をこめるが遂にA・Tフィールドが破られる。そして式号機の左胸部にレリエルのプログナイフが突き刺さった。

「・・・ぐっ、ぐうう！」

アスカはあまりの痛みに耐えきれず身をよじる。レリエルはそんなことを知る由もなく、今度はひたすら式号機を殴り始めた。

「・・・つつ!!！」

アスカはさらに追加された激しい攻撃について気を失ってしまった。

「パイロット、神経パルスに異常発生！」

「回路遮断！。シンクロ率、大幅に減少！」

「このままでは危険です！」

「・・・神経接続解除！」

「ダメです。受け付けません！」

「何ですって!?!」

混乱するミサトたち。そこにゲンドウが命令を下した。

「・・・ダミープラグを起動しろ。今式号機とアスカを失うのは得策ではない」

「しかし、あれは安全性から・・・」

「構わん。どうせこのままではディラックの海も破ることはできん。」

「・・・わかりました」

シゲル、マコト、マヤが各々のキーボードを叩いていく。

「準備整いました」

「了解。ダミープラグ、起動」

ミサトが号令を出した瞬間、アスカと式号機のシンクロは強制的に解除され、代わりに式号機がダミープログラムとシンクロした。目の色が赤に変わる。

「グオオオオ!!」

式号機がほえると同時にレリエルにけりを加え、レリエルをぶっ飛ばす。すると次に強力なA・Tフィールドを展開して捕らえられていた腕をディラックの海から引き出した。

「オオオ!!」

式号機は素早くしゃがむと反動を利用してレリエルにけりを加える。さらに全体重をのせた拳をレリエルの顔めがけて振り下ろし、一撃

で粉碎する。そのまま抵抗できなくなったレリエルをその名の通り木っ端みじんにした。

跡形もなくレリエルを粉々にした後シンクロが中断され、式号機を停止させた後地下通路により回収された。

式号機がダミープラグを使用したとき、参号機はすでにバルディエルと接触していた。

「コイツか、わしの相手は」

参号機はプログナイフを装備する。バルディエルは参号機を認めると右腕を上を高々と上げた。

「なんや？」

参号機が接近しようとしたとき、バルディエルは参号機めがけて腕を伸ばして殴った。

「・・・っ!？」

突然のことでA・Tフィールドを展開できずにもろに食らう。

参号機は吹っ飛ばされた。

「腕が伸びるなんてセコいな！」

参号機は体勢を立て直す。そこにバルディエルはさらに、今度は左手を硬質化させ参号機の右肩を切断する。

「・・・グワァッ!！」

さらに接近して参号機の首を締め始めた。

「くっ、がっ・・・あ」

トウジも苦しそうにもがく。

「ぐっ・・・ワシはまだ、死ねないんや。シンジや惣流や綾波や霧島や・・・いいんちよが、ヒカリが待っとるんや。妹も待っとる。まだこんなところでくたばってる場合やないんじゃ!!」

するとトウジの思いに反応したかのように参号機の眼が赤く変わった。

「シンクロ率100%!!」

「まさか・・・、暴走!?!」

参号機は左腕でバルディエルの顔に力いっぱい殴った。それをくらい、バルディエルは参号機の首から手を離す。参号機はさらに蹴りを加え、バルディエルをぶっ飛ばした。

そして落ちていた参号機の右肩を傷口にあてるとその部分が結合し再生した。

「グオオオ!!」

参号機は雄叫びをあげるとジャンプして蹴りを加える。そして右手でバルディエルのコアを殴り貫いた。

いっぽくおいてバルディエルは爆散した。

その後、暴走を終えた参号機は回収された。

式号機が回収され、参号機が暴走を始めたとき、零号機と伍号機は

超長距離射撃専用武装、S型装備に変更して迎撃ポイントでアラエルを捉え続けていた。

伍号機は陽電子砲なので大気圏外の敵には攻撃が届かない。零号機はポジトロン・ライフルを装備していたが距離がありすぎて威力が半減してしまう可能性がある。のでどちらにしても陽電子砲が届かなくては意味はない。

よって依然動きを見せないアラエルを攻め倦ねていた。

「くそっ、どうすれば・・・」

その時、ついにアラエルが動き出した。

アラエルから伍号機にむけて虹色の光が降り注がれた。

「・・・っ!!」

「なにこれ、攻撃!？」

ミサトも動揺を隠せない。

「いえ、A. Tフィールドと酷似していますが違います。これは・・・
・アンチA. Tフィールドです!」

「精神パルス逆流!。精神汚染が始まります!」

「ぐうっ!」

カヲルはその光線を浴びてもがく。

「なめるな!」

伍号機が強力なA・Tフィールドを展開してアンチA・Tフィールドを防ぐ。

「捉えた！」

その瞬間零号機がポジトロン・ライフルを放つ。が、それはアラエルの展開したA・Tフィールドでいとも簡単に防がれた。

「・・・綾波、A・Tフィールド展開してくれるかい？」

「かまわないけど？」

そして零号機がA・Tフィールドを展開すると伍号機はプログナイフを装備した。

「・・・あなたまさか！？」

「そのまさかだよ」

伍号機はプログナイフをロンギヌスの槍に姿を変えさせた。

「なにそれ！？」

「初号機が持つてるもののコピーだよ。もっとも、コピーだからオリジナルにはとうてい及ばないけどね」

「碇、完成していたのか」

「ああ、先日ほどな。こんなに早く使う日が来るとは思わなかったが」

伍号機は両手に力を込める。

「・・・ハアアア!!」

伍号機は助走をしてアラエルめがけてロンギヌスの槍を投擲した。ロンギヌスの槍はまっすぐアラエルめがけて飛んでいく。

アラエルはA・Tフィールドを展開してそれを受け止めたが中和され、勢いはそがれずにアラエルにあたる。アラエルはそのまま消滅した。

ロンギヌスの槍はアラエルと一緒に消滅した。その後零号機と伍号機は回収された。

式、参号機が回収され、零、伍号機がアラエルと接触しているときに初号機と肆号機はゼルエルと接触していた。とはいってもゼルエルは初号機、肆号機を凌駕していた。

「ぐっ!!」

初号機はゼルエルが左腕を伸ばしてした攻撃に対応できずに吹っ飛ばされる。

「いの!!」

肆号機はパレットライフルをゼルエルに向けて放つがそれは全く意味をなさなかった。

「食らわない。A・Tフィールドも展開してないのに!?!」

ゼルエルは肆号機にむけてビームを放つ。肆号機はかろうじてA・

Tフィールドで防ぐ。

「こんのお!!」

初号機はゼルエルの右方から体当たりをし、肉弾戦に持ち込む。その最中に近距離から放たれたゼルエルのビームによって右腕を切断される。

「ぐっ、ああああ!!」

初号機はその攻撃を食らいながらもゼルエルにけりを入れて吹っ飛ばす。

「今よ!」

肆号機は武器庫ビルから受け取ったバズーカをゼルエルにむけて放つ。それをゼルエルはもろにくらった。

「もらった!」

初号機はロンギヌスの槍を手にとるとゼルエルのコアに突き刺した。悲鳴のようなものをあげてゼルエルは爆散した。

多大な被害を出したが複数同時展開した使徒を殲滅することに成功した。

次回予告

複数同時展開した使徒を殲滅することに成功したシンジたち。彼ら

は息抜きのために海に行く。そこで語られる彼らの思いとは。

次回、ANOTHER world
それぞれの想い

第拾肆話 それぞれの思い（前書き）

おくれてすみません

第拾肆話 それぞれの思い

「海だあゝ!!」

ここは千葉の九十九里浜。シンジたちは三日の休みを「ネルフ」から与えられ、遊びに来ていた。もちろん、現在は貸し切り状態である。

「みんな、まーんぞくするまで遊びなさいよ!」

ミサトが言い放つ。

「はい!!」

その後、シンジたちは水着に着替えて出てきた。

シンジ、カヲル、トウジ、綾波、アスカ、マナ、ヒカリ、ミサト、加持、リツコは各個人個人思い思いの水着を着てきた。

（ここでみんなが着ている水着は読者の想像にお任せします。）

そしてみんな海に入り始める。が、マナとトウジだけ入ろうとしない。

「どうしたの?。もしかして泳げないとか?」

アスカが小馬鹿にしたように言う。マナとトウジは顔を俯かせたまま頷く。

「しょうがないなあ。ほら、マナ」

「仕方ないわね、トウジ」

マナはシンジに、トウジはヒカリに手を引かれて少しずつ入っていく。

「これから個人レッスンが始まるわね。邪魔しないように別のところへいきましょ」

アスカはそう言うともみんなを別のところへ誘導した。

case1トウジとヒカリ

「これからトウジを泳げるようにします!!」

「無理や!。体育の先生やてワシを泳がすことができなかったんにいんちょに出来るんかいな!？」

「できないじゃなくてやるの!」

ヒカリに圧倒されたトウジは

「はい・・・」としか言えなかった。

「大体トウジは体の使い方が悪いのよ。もっとリラックスして」

そういった後にヒカリは25メートルの位置まで泳いでいった。

「ここからあの岸まで泳いでこれたら合格!」

そしてヒカリはトウジを残し岸まで行った。

「この距離をワシ一人だけで・・・」

楽勝と思えるこの距離でも泳げない人から見たら相当な距離に感じる。

「ワシとて男や！。見せたるで、意地を！！」

そうしてトウジは泳ぎ始めた。

「体の使い方、使い方・・・」

心の中で何度もつぶやきながら岸めがけて泳いでいく。
そしてついに岸までたどり着いた。

「やっぱり、楽勝じゃない。今まで出来ないって思ってたから出来なかったのよ」

「そうみたいやな。すまんかったな、イインチョ」

そうしてヒカリとトウジはアスカと合流して遊んだ。

case 2 シンジとマナ

「シンジ」

マナは海には行ってからシンジにくっついて離れない。

「まずは・・・水になれないとね。顔をつけてごらん」

シンジがそう言うがマナは涙目にして首を横に振る。どうやら相当

な水嫌いらしい。

「僕も一緒にやるからさ。ね？」

シンジの言葉に弱々しく首を縦に振る。そしてシンジは顔をつけた。マナも決心したのか顔をつける。そして目を開けるとシンジの顔が目の前にあった。

「・・・!？」

マナは驚いて顔を上げる。

「アハハッ!!」

シンジは笑ってマナをみた。

「もう、シンジったら!。溺れたらどうするの!」

マナはシンジに対して怒りを露わにした。

「ごめんごめん。でも震えは無くなったでしょ？」

「・・・ホントだ」

気づけばもうマナの体のふるえは止まっていた。

「ふるえがとれたってことは水に対する恐怖心がなくなったってこと。次は早速泳いでみよう」

シンジは泳ぐジェスチャーをして言う。

「僕がマナの手を持つからマナは体勢を維持して進んでみよう」

マナは首を縦に振るとシンジの手をつかみ、ばた足を始めた。

「なんだ、泳げるじゃないか」

そうするとシンジは少しずつ手をずらしてマナの手を離した。しかしマナは沈むことなくまっすぐ進んだ。

「すごいよ、大成功だ!!」

マナと一緒に岸に上がるとシンジが褒め称えた。

「シンジのおかげよ」

マナは笑ってそういい返す。

そうしてみんな泳げるようになった彼らは海を十分に満喫し、ホテルに戻った。

一日を海に費やした彼らはぐっすりと眠ってしまった。

二日目

目を覚まし、朝食等を済ませたシンジはあることに気づいた。

「・・・女子が綾波以外いない!？」

トウジとカヲルも気づいたらしく騒然とする。と、そこにレイが手紙を持ってくる。

「部屋にこんなのが」

シンジたちは開けてその文章を読んでみた。

「みんな、驚いたでしょ!?!。実はこれ、今回のメインイベント。その名も>恋人を助け出せくゲーム!!。ルールは簡単!。同封されてる地図とヒントを手がかりにして最愛の彼女を取り戻そう!。追伸

悪いけどレイは今回はみんながどっか行かないように私と一緒にリーダーで監視してもらうわよ。ごめんね!。

それじゃあみんな、頑張って!!

b y ミサト」

「彼氏いないの私だけだしね・・・」

レイはがっくりと肩を落とした。

「それじゃあはやく探しに行かないと!」

シンジたちは地図を片手にホテルを出て行った。

「怪我しないでね!」

レイはそう言って彼らを見送った。

シンジ、カヲル、トウジの三人はとりあえず海岸に向かった。するとそこに三つの札がたっていた。

札にはそれぞれ、マナ、アスカ、ヒカリと書いてあり、続いてヒントが書かれていた。

「ヒカリ・・・」

ヒカリがいつも作ってくれるものは？」

「・・・弁当や。つまり弁当屋に行けばいいんか！」

トウジはそう言うと言った。

「アスカ・・・」

アスカの一番はじめに尊敬した人の名は？そしてその人の名字の持つ意味は？」

「たしか加持リョウジだったはず。そして加持とは仏の加護を祈ることのことをいう。仏・・・、寺か！？」

カヲルはそう言うと言図を見ながら走っていった。

「マナ・・・」

マナの大切にしているものは？」

「マナの大切なもの・・・。僕のあげたマフラーかな？。とすればどこに・・・。一か八か！」

シンジはそう言うと言った。

トウジは街で一番美味しいと言われる弁当屋についた。すると貼り紙があつてそこにはこうかかれていた。

「ヒカリは兄弟がいる。○か×か。○だったら地図を見て一番低い山の麓に、×だったらビデオショップに行け」

「ヒカリは兄弟がおる。間違いない。せやから山の麓に行けばいい

んか。しかし、ワシは地形図は苦手や！」

トウジは地図に指を這わせ、あれこれいいながら読み取る。

「この山か！」

苦労して見つけた山を目指して走る。

山の麓につくとまた立て札を見つけた。

「I a s t h i n t

ヒカリが初めて作ったお弁当に入っていたものは？

1 たまごやき

2 カラアゲ

3 ハンバーグ

地図の裏面に山の拡大図がありそれに記されている小屋にそれぞれ番号が振ってある。適応する小屋に番号を選んだら行け」

「ヒカリが初めて作った弁当にはたまごやきがぎょうさん入ってた。つまり1の小屋に行けばいいんやな！」

トウジは山道を駆け上りある山小屋に向かう。

「ヒカリ！」

トウジが扉を開けるとヒカリが座っていた。

「トウジ！！」

ヒカリがトウジの姿を認めると抱きついてきた。

「ほな、帰ろうか」

「うん！」

トウジとヒカリは手をつないで帰って行った。

カヲルは寺に着くと貼り紙を見つけた。

「アスカが唯一作れる料理は？」

「カレーだな。スーパーに行ってみるか」

カヲルがスーパーに着くとある人物がカヲルに話しかけてきた。

「ミサトから預かったラストヒントだ。アスカの母、キョウコが好きなものは？」

「たしかキョウコさんの好きなものは紅茶。あそこか！？」

カヲルはスーパーの中に入り紅茶の在庫がある倉庫に向かう。するとアスカがいた。

「カヲル！！」

アスカはカヲルの姿を認めると近寄ってくる。

「全く、遅いわよ！。心配したんだから！！」

「すまないね」

するとカヲルはアスカを抱き寄せた。

「・・・！？。でも今回は特別に許してあげるわ」

そしてカヲルとアスカは帰って行った。

シンジが行った場所はシャルと呼ばれるブランドのお店だった。シンジがプレゼントしたマフラーを作ったのもここだった。シンジが近寄るとある人物がいた。

「問題だ。マナがシンジを好きになった理由は？」

シンジはどう表現すればいいか分からなかったが顔を赤くすると周りに聞こえないように言った。

「・・・正解だ。ここにいけ」

地図に示された場所を確認するとシンジは走っていった。

「ここか・・・」

シンジは灯台にいた。階段を上り一番上まで行くと扉がありそれを開ける。するとマナがいた。

「マナ！」

シンジが呼ぶとマナは振り向いて駆け寄ってきた。

「絶対くるって信じてたよ」

「当たり前だろ。こない訳ないじゃないか」

「そうだね。ありがと、シンジ」

するとマナがシンジと唇を重ねた。シンジは一瞬驚いたがすぐにマナを抱き寄せた。

数分後マナとシンジは手をつないで帰って行った。

「みんなお疲れ〜！。楽しかった？」

みんなが到着するとミサトがジュースを持ってやって来た。

「お疲れじゃないわよ。全く、いつまでも子供なんだから」

アスカがミサトに檄を飛ばす。

「まあまあ、思い出づくりにあったでしょ！？。面白かったわよ、見てて」

「見ててって全部！？」

シンジがミサトに言う。

「もっちゃん！。ぜーんぶ見たわよ。意外と大胆だったわね、みんな」

するとみんな顔を赤くして、

「ミーサートー！！」

と叫んだ。

「冗談よ、冗談！！。はやくお風呂入ってきちゃいなさい」

ミサトにそう言われみんなは渋々お風呂に入っていた。

お風呂に入って外で夜空をみていたシンジのそばにマナが近寄って座る。

「シンジ」

「マナ」

「ねえ、私たちこれからどうなるのかな？」

「使徒を倒したら？」

マナはこくつと首を縦に振る。

「どうなるんだろうね……。やっぱりふつうの生活に戻るんじゃないかな」

「そうだといいわね。シンジ、一つ約束してほしいの」

「何？」

「これからもずっと一緒にいて」

「当たり前だよ」

「よかった」

そうして部屋に戻って寝た。

三日目も十分に満喫したシンジたちは無事帰って行ったのであった。

———次回予告

休暇を満喫したシンジたち。それから一週間後使徒が現れた。
使徒に立ち向かうマナ。その時シンジに迫られた究極の選択とは

次回 ANOTHER world 別れ

第拾伍話 別れ（前書き）

更新が不定期なのはすみません

第拾伍話 別れ

休暇から一週間後・・・

「まさか肉眼で使徒確認とはね……。これはマズい」

ミサトはルノーを走らせ「ネルフ」へ向かっていた。

「遅いわよ。何やってたの!？」

第一発令所につくとすぐにリツコからの檄が飛ぶ。

「いいわけはしないわ。状況は!？」

「依然、使徒からの動きは確認されません」

ミサトの質問にマヤが答える。

「パターン青からオレンジへ周期的に変化しています」

「あの使徒の形状も二重螺旋構造から一重構造に変化しています」

「まるで人のDNAのようね。コアは!？」

「現在、そのような部位は確認できません」

「マギも回答不能を示しています」

それらを聞いてミサトは顔をしかめる。

「今までのなかで一番手強いかもね。エヴァの状況は!？」

「現在、先日の使徒複数同時展開の影響で肆号機以外は凍結中です」

「パイロットは控え室で待機しています」

「肆号機の出撃準備、急いで！」

そして肆号機の出撃準備が終わった。

「マナ！」

マナがエントリープラグに乗り込もうとしたときシンジが駆け寄る。

「気をつけて」

「お帰りのキス、期待してるわよ!!」

「な、なにいつてんだよ全く!。・・・期待してな」

「うん!!。それじゃあ行ってくるね」

そういつてマナはエントリープラグに乗り込んだ。

「エヴァンゲリオン、発進!!」

ミサトの号令で射出される。

地上にでたときは使徒とかなり離れたポジションに出された。

「これから第拾陸使徒はアルミサエルと呼称します。気をつけてね」
肆号機は近くのライフルを手に取るとアルミサエルにねらいを定める。

「なんなんだろ、この感じ・・・」

マナがそういった次の瞬間、

「パターン青！。変化、なくなりました！！」

「来る！！」

すると輪状になっていたアルミサエルが一本の紐のようになり肆号機に攻撃した。

「くっ！」

肆号機はその攻撃を避けるとライフルで攻撃した。
直撃したが効いている様子はない。

「・・・ならっ！」

今度はプログナイフを装備し、カウンターの要領で切り裂く。だがこれも全く効いていない。

「そんな！？」

すると後方からアルミサエルが攻撃を仕掛けてきた。

「・・・!?!」

肆号機はA・Tフィールドを展開するが侵食され胴部を貫かれる。その部位からは血管のようなものが浮き出していた。

「使徒、肆号機と一時的融合を開始しました!」

「こいつも侵食型!?!。肆号機のA・Tフィールドは!?!」

「展開中、しかし使徒に侵食されています。すでに15%融合しています!?!」

「マズい!?!」

「この・・・!」

肆号機はA・Tフィールドを最大まで展開して使徒を引き出そうとする。しかし、それも無意味だった。

「初号機の凍結を現時刻を持って解除。出撃だ」

ゲンドウがそう言う。

「了解!。初号機、発進!?!」

初号機が地上にでるとアルミサエルもそれに反応して攻撃してくる。初号機はそれをかろうじてかわした。

「初号機はA・Tフィールドを展開して使徒を引き離して!?!」

「了解！」

初号機はA・Tフィールドを展開してアルミサエルを引き離そうとする。アルミサエルとの接触面からはやはり血管のようなものが浮き出る。

「くっ、この！」

すると突然初号機が吹っ飛ばされた。

「肆号機がA・Tフィールドを展開して初号機を吹っ飛ばしました！」

マナはエントリープラグ内の右上にある球状のようなものをまわすとパスワードを入力し始めた。

「こいつを倒すにはこれしかない・・・！」

「A・Tフィールド反転！！！」

「まさか、使徒を押さえ込むつもり！？！」

「肆号機、自爆ユニットを起動させました！！！」

「自爆するつもり！？！」

「さよなら、シンジ・・・」

マナはボタンを押したが肆号機が自爆することはなかった。

「自爆ユニット、停止しました！。使徒に侵食され強制的に止められました！」

マナは拳をたたきつける。

「これじゃ、何にもならないじゃないの！」

「マナ、いま助けてやるから！」

初号機はA・Tフィールドを展開してまた引き離そうとする。

マナはその様子を見て意を決して言った。

「シンジ、いままで使わなかった一生のお願い、使ってもいい？」

「何？」

「私を殺して」

「・・・え？」

シンジはなにを言われてるのか理解できなかった。

「だから、私を殺して。お願い」

第一発令所内の人間もその発言に混乱する。

「あの子、なにいて・・・」

アスカたちも呆然とする。

「なにいつてんだよ。そんなことできる訳ないだろ！」

シンジが叫ぶ。

「このままじゃなにされるかわからない。だから、何か起こる前に・
・ね？」

「訳わかんないよ！。さっきも自爆しようとするし、まだ方法がなくなつたわけじゃ・・・！」

「もう、ないの」

「えっ？」

「もう方法はないの。もう・・・」

「嘘だよ、そんなの。嘘だ！。ねえ、ミサトさん、父さん、母さん、リツコさん！。嘘ですよ、うそだって言ってくださいよ！！」

シンジの投げかけられた言葉にみんな反応できずにいた。マナが言っていることが正しかったからだ。

「・・・そんな」

「だから、ね」

初号機は突然A・Tフィールドを展開するとアルミサエルを手でつかみ引き離そうとする。

「世界がどうなったっていい、自分がどうなったっていい。でもマナだけは絶対に助ける!!」

「シンジ・・・」

マナはその言葉を受け、涙目になる。それでも肆号機は初号機を蹴ってふっ飛ばした。

「そんな事したら、嫌いになっちゃうよ?」

「なにバカなことやってんだよ!。さっきは自爆しようとするし、一生のお願いが殺してくれだなんて・・・おかしいよ!!」

「じゃあ、これならいい?」

「えっ?」

マナは目をつぶりそして言った。

「私のいない世界で幸せに暮らして」

「だから、マナはどうするんだよ!!」

「あなたの勝手な判断で世界を滅ぼしたら許さないから!!」

シンジはそれを聞いてはっとした。確かにマナを助けることはあきらめない限り可能かもしれない。でもそれで世界が滅びたら・・・。

そしてしばらくの沈黙の後、初号機はロンギヌスの槍を装備した。

「マナが泳げるようになったから一緒に海に行きたかったのに・・・」

シンジは最後の抵抗をした。

「その夢は心の中でしまっておいて・・・ね」

マナは涙をながしていた。ポタポタとプラグスーツにシミを作る。

そういえば、私はいつもシンジをみてたな。ずっと、ずっと。私はいつもしゃべってるし一緒に帰れるアスカがうらやましくて必死にアピールした。シンジがアスカのこと好きなのかなってあきらめかけたとき、シンジは私に告白してくれた。うれしかったなあ・・・。

「大好きな人と肩を寄せ合って互いに支え合って生きていけたらってずっと思ってた」

「思ってたなんて過去形でいうなよ・・・」

シンジも泣いていた。

「でもこの夢も今日でおしまい。私はいつまでも見守ってるから・・・」

「マナ・・・」

大好きな人が心の底から大好きな人の名前をつぶやく。

「なに？」

その人も反応する。

「生まれ変わったら、また一緒になれるかな・・・」

「なれるよ、きっと」

「そっか・・・」

その瞬間に初号機の手に力がこもる。

「じゃあね、マナ・・・、またね」

「またね」

またしばらくの沈黙が続く。そして・・・

「シンジ」

心の底から大好きな人の名前をマナは最高の笑顔で呼んだ。

「ありがとう、さよなら。大好きっ」

その瞬間、初号機のロンギヌスの槍が肆号機のコアを貫いた。いっぱいおいて爆発する。

「アルミサエル、消滅を確認。エヴァ肆号機、爆散しました・・・」

初号機は肆号機を貫いた姿のまま立ち尽くしていた。シンジはひたすら声をあげて泣き続けた・・・。

—— 次回予告

自らの手で最愛の人の命を奪ってしまったシンジ。この事実が彼を絶望へとたたきつける。この時シンジに救いの手を差し伸べたのは。

次回、A N O T H E R w o r l d 別れの後で

第拾陸話 別れの後で（前書き）

そろそろ最終局面です！！

第拾陸話 別れの後で

「おっはよう!!」

アスカが元気よく教室にはいつてきた。

「あら、シンジはいないの？」

見渡す限りぽかんと二つの机があいている。

「えー、みんなが一応そろったのでいいですが、霧島さんは家庭の都合で引越になりました」

その言葉を聞き、エヴァパイロット以外は驚いたような顔をする。なかにはシンジがかわいそうだという声もあがっている。

「シンちゃん・・・」

レイがぼつりとつぶやいた。

そして昼休み・・・

「シンちゃんがない!？」

「今おばさまと連絡取ったらいなかったのよ。まったく、どこにいるんだか・・・」

それを聞いてみんなは心配になる。

「どこ行っちゃったんだろう・・・」

レイは自分たちの心持ちとは全く違う明るい青い空を見上げていった。

そのころシンジは電車、バスを乗り継いで郊外にある山の休憩所で座っていた。霧がかかり、霞んで第参新東京市がみえる。

「これからどうしようかな・・・」

今のシンジは無気力状態だった。自分でもなにをしていいかわからない。

「マナは今いたらなんていってくれるかな……。もうやめよう、こんなこと」

シンジはその後一晩をそこで過ごした。

次の日、シンジは墓標の前にたっていた。

霧島マナと記されたそれには今シンジが置いた花で飾られている。あの爆発後、奇跡的にマナは体には目立った傷一つない状態でみつきり、まるで眠っているかのようにだった。

シンジは葬儀に参加はしなかった。親のいないマナにとってシンジはいてやらなくてはいけない存在だったが、それではいつまでも引きずってしまうと考え、こうして今きている。

「ごめんね、葬儀にいつてあげられなくて。でも、いったらきつとだめになっちゃうと思ったから」

シンジは言った。

「マナとの思い出は大事に取っておきたいと思う。捨てたら、僕もマナもいつか悲しいって感じる時がくると思うから」

そうしてシンジは墓標にキスをした。

「生きてるうちは一回しか出来なかったからね。でもそれじゃ悲しかったかな。・・・、またくるよ。じゃあね、マナ・・・」

そしてシンジは電車に乗って第参新東京市に戻った。

戻った後も家には帰らず高台の公園に向かった。とにかく一人になりたかった。

「シンちゃんみーっけ!!」

シンジがベンチに座っているとレイが寄ってきた。

「市内でくる場所としたらここしかないって思ったんだけど大当たりだ」

「綾波・・・」

「一日中外にでて、少しはすっきりした?」

「すこしはね・・・」

レイはシンジの隣に座った。

「霧島さんはね、シンちゃんとの思い出、大事にしてたんだよ」

そう言うレイはマフラーをシンジに差し出した。

「霧島さんの部屋に大事に保管してあったんだって。手紙付きで」

レイが言うとおりの手紙もあった。

手紙には

「シンジへ」と書かれていた。

シンジはその手紙をあけた。

「シンジへ。

マフラーありがとう!!!。私、ずっとほしかったものだから嬉しいです!。今度、また冬になったらこのマフラーまいてシンジの隣にいたいです!!!!。

マナより」

「マ・・・ナ・・・」

シンジはこの手紙を読んでいままで我慢していたものすべてがこみ上げてきてしまった。

「シンちゃん・・・」

レイはそんなシンジをみるに耐えきれずそっとシンジを抱いた。

「今回一番つらいのはシンちゃんだからね。思いっきり泣いちゃいなさい」

「うっ・・・、うわああっ!!」

その言葉に触発され声を上げて泣き始めたシンジ。シンジはただそばで抱いてくれる人にすがりすべてを流し尽くすかのように泣いた。

数分後・・・

「ありがとう、綾波」

「どういたしまして」

そうして帰路にたとうとしたシンジをレイが止めた。

「綾波・・・？」

不思議そうに顔をのぞき込むシンジ。

「私は霧島さんみたいじゃないし、シンちゃんといった時間も短い。けど私はシンちゃんが好き。誰にも負けないくらい。たとえば霧島さんの代わりになってもかまわない。だから・・・！！」

すると突然シンジはレイの背中に腕を回し抱き寄せた。

「・・・！！」

「マナの代わりになってもかまわないなんていうなよ。綾波は綾波のままでもいいんだよ？。それに僕はもう、未練はない。それに綾波なら、マナも許してくれるよ」

「それじゃあ・・・」

「お互い、マナのぶんまで幸せになろうね」

「うん！！」

そして二人の影は並んで家までいった。

———次回予告

新たな道を踏み出したシンジ。そこにゼーレはついに人類補完計画を開始する。戦自によって占拠されるネルフ本部。そこに追い打ちをかけるように投入される量産型エヴァ。

その中でついに道を見定め始めるシンジたち。

シンジをはじめチルドレンたちとネルフ職員はサードインパクトを防ぐことができるのか

次回 ANOTHER world I NEED YOU

さあてこの次もサービス、サービスうう！！

第拾漆話 I NEED YOU (前書き)

感想よろしくお願いします

第拾漆話 I NEED YOU

漆黒の闇の中にモノリスが円を作るように並んでいた。

「ついに拾陸使徒までの殲滅が終わった」

「左様。計画もついに最終段階だよ」

「しかし第拾漆使徒はどうする？」

「それは問題ではない」

「その通り。裏死海文書に書かれていないことが起きるのであれば書いてあることが起きないときもある」

「なるほど」

「すでに量産型エヴァは捌号機から拾陸号機まで完成している。ダミープラグはアギエルの思考プログラムだ」

「うむ。それでは始めようか」

「我らの手で人類の補完を」

そしてモノリスは消えた。

第一発令所ではオペレーター三人組が雑談をしていた。

「俺ら、これからどうなるんかねえ」

青葉が天井を見上げながらいう。

「国連関係の職に就くんじゃないのかな。一応、ここも国連直属だし」

マコトがいう。

「そしたら、エヴァってどうなっちゃうんでしょうね」

マヤが疑問を問いかける。

「そーいや、どうなるんかなあ」

ミサトはルノーの中で考え事をしていた。

「使徒が殲滅してエヴァの役目は終わった。なのに委員会、いや、ゼーレはエヴァの処置に何もいってこない。ってことはエヴァでなにかするってことね。いったいなにを・・・」

加持はスイカ農園のベンチに座り込んでたばこを一服していた。

「さて、使徒がいなくなっついにゼーレも乗り出すかな。サードインパクトに。世界の行く末がどうなるのか、見物だな」

そして翌日・・・

加持の提案でチルドレンたちはここ第一発令所にいた。というか、ネルフ職員の大部分が集まっていた。

「これより最後の任務を下す」

ゲンドウがネルフ職員とチルドレンたちに言う。

「全勢力を持ってサードインパクトを防ぐことを第優先にする。ただし・・・死ぬな」

「了解!!」

みんなが声を合わせて言う。その後警報が鳴った。

「次々に監視カメラがロストしています!!」

「まずは戦自か・・・。ケイジに行く通路を四本確保し、それ以外にはすべてベークライト注入!!。内部にできるかぎりいれないで!!」

「セントラルドグマを物理的封鎖!!」

「マギがハッキングされています!!」

「松代のか!?!」

「いえ、アメリカ、ドイツからも確認されています。マギタイプ四!!」

「四対一か・・・。厳しいな」

「私がやるわ」

するとリツコがキーボードを叩く。

数分後にはマジに対するハッキングを止めることに成功した。

「プロテクトをかけました。あと四十八時間は大丈夫です」

「うむ、ご苦労。戦自はどうなっている？」

「現在、内部進攻は不可と判断したのか、外部からの攻撃を開始しました！」

「エヴァ式号機と参号機を出撃準備！。迎撃するわよ！！」

ミサトが命令を下す。それに従いアスカとトウジはエントリープラグに乗り込みジオフロントにでる。

すでにジオフロントには戦自のヘリや戦車が大量にあった。式号機と参号機はそれを片っ端から破壊していく。ミサイルなどが当たり爆発するが何の効果もない。

「はっ！。そんなの効かないって！。こっちはA・Tフィールドと・・・」

「一万二千枚の装甲があるんやからな！！」

そう言って次々と破壊していく。

「やはり、毒は毒をもって制するしかない」

この状況を見かねたゼーレが動き始めた。

「できる限り穏便に済ませたかったのだが仕方がない。エヴァ全機起動」

そしてジオフロント上空に到達すると輸送機から量産型エヴァを降下させる。途中で量産型エヴァは羽を広げるとそれをはためかせ静かに降り立った。

「なにあれ、エヴァ!？」

アスカが驚いたようにいう。

「S2機関搭載型を全機投入とは……。まさか、碇、奴ら……」

「ああ。老人たちはここでサードインパクトを起こすつもりだ」

「零号機と伍号機、発進準備!。みんな、よく聞いてちょうだい。必ず、量産型エヴァを殲滅してちょうだい。サードインパクトを防ぐためにも!！」

「了解!！」

量産型エヴァは両刃の剣を構えると羽を畳んだ。

「戦闘態勢ってわけね……。ミサトさん、武器、好きに使っちゃいますよ!！」

すると零号機は近くの武器庫ビルからマステマを取り出し、構えた。式号機はマゴロク・ソードを、参号機はディアルソーを、伍号機はパレットライフルを装備する。

「でりゃあ!！」

式号機が量産型エヴァに突っ込むと量産型エヴァが両刃の剣を振ってくる。

「食らえば怖いけど・・・、遅い!!」

式号機は剣の軌跡を読みとると回避、相手の懐に入り、右腕を切り落とした。そしてニードルガンを顔めがけて発射。倒れ込んで動かなくなった。

「一つ!!」

「てええい!!」

零号機はマステマで量産型エヴァを一機砲撃で倒すと横から迫ってくる量産型エヴァに蹴りを食らった。

「くっ!!」

体勢を整えると量産型エヴァはさらに両刃の剣で切り裂こうとする。

「いいかげんに!!」

零号機はそれをかわすとマステマで量産型エヴァに全体重をのせて切り裂いた。

「三つ!!」

参号機はディアルソーをふるって三機と戦っていた。量産型エヴァは両刃の剣を使い参号機に切りかかる。

「あまい!!」

参号機は華麗に斬撃をかわすとディアルソーを一気に横に振った。都合よく横に並んでいた量産型エヴァはディアルソーに切り裂かれ三機まとめて倒れた。

「六つ！」

伍号機はパレットライフルを駆使し量産型エヴァを三機相手にする。両刃の剣をプログレッシブナイフで受け流しながらパレットライフルを放つ。一機倒したところで弾がきれる。

「ちっ・・・！」

パレットライフルを投げ捨てるとライフルを手にしプログレッシブナイフで量産型エヴァの左腕を切り裂く。その後そのまま蹴り飛ばした。そして最後の一機をファルザーで串刺しにした。

「ミサトさん、これで大丈夫ですか？」

カヲルがミサトに言う。

「そうね。ご苦労様。戻っていいわよ」

そしてエヴァが回収されようとしたとき急にマコトが叫んだ。

「量産型エヴァ、再起動！」

「何ですって!？」

「やはりS2機関か・・・」

そしてエヴァに両刃の剣が飛んでくる。それをA・Tフィールドで防ぐ。しかしそれは突如ロンギヌスの槍に変化した。

「・・・ロンギヌスの槍!?!」

そしてロンギヌスの槍はエヴァのA・Tフィールドを破り、貫いた。

「キャアアア!?!」

「グウウ!?!」

それはパイロットにも影響し、叫び声を上げる。

「S2機関停止!。エヴァ活動を停止しました!」

「まずい!。初号機発進準備!。すぐ出して!?!」

そして初号機がジオフロントにでるとエヴァが浮いていた。

「やつらまさか!?!」

「いまこそサードインパクトを起こすとき」

すると伍号機を中心に弐、参、零号機が配置され、生命の樹が浮かび上がる。

「綾波を、アスカを、トウジを、カヲル君を・・・返せ!?!」

鋭い眼光でそれを睨みつけると初号機は雄叫びを上げる。すると初号機の周りに今まで所持していたロンギヌスの槍にくわえさらに五本のロンギヌスの槍が飛んできた。

「やはり初号機は我らの邪魔をするか・・・」

量産型エヴァは一気に初号機に襲いかかる。

初号機はロンギヌスの槍を一本構えると光を放ちコピーのロンギヌスの槍を破壊していく。そしてそれまで浮かんでいたエヴァはジオフロントに落ちた。

「次!!」

初号機はロンギヌスの槍を宙に浮かせると量産型エヴァに向けて放った。それは真っ直ぐ量産型エヴァのコアを貫く。と、シンジは急に漆黒の闇に包まれた。

「なぜ・・・」

声が聞こえる。

「なぜ、一緒になることを拒むの？」

「確かに一緒になれば心地いいかもしれない。でもそしたら自分になくなってしまう」

「傷つくこともなくなるのよ？」

「でもそしたらアスカやトウジやカヲル君や・・・綾波を感じられなくなってしまう。それはイヤだ」

「なら、アナタはなにを望むの？」

「みんなと会いたい。自分はここにいたい。この気持ちは本当だから」

「・・・おめでとう」

「マナ・・・！」

「シンジ。シンジは私のお願い、きちんと覚えていてくれたのね」

「うん。ごめんね、マフラーかけて隣にいれなくて」

「ううん。いいの、私はシンジの心の中にいるから。綾波さんと幸せにね」

「うん。ありがとう、マナ。じゃあ、また」

「またね・・・」

気づくとシンジはエントリープラグ内にいた。

量産型エヴァはコアを貫かれて爆散していて零、弐、参、伍号機はすでに回収されたみたいだった。

「終わった・・・」

そう、彼らはサードインパクトを防ぐことに成功したのである。

—— 次回予告

サードインパクトを防ぐことに成功したシンジたち。彼らはいつもの日常に戻る。個人個人が描く幸せの形は。

次回 A N O T H E R w o r l d 最終話 幸せのカタチ

最終話 幸せのカタチ（前書き）

ラストです!!

最終話 幸せのカタチ

使徒を倒し、サードインパクトを止めてから一ヶ月後・・・

「これでおしまいだ」

ゲンドウとユイは「ゼーレ」のメンバー全員を捕まえることに成功した。

「碓、貴様ら・・・」

「これからおまえたちは牢にいれられるだろう。日の目を見ることは二度と・・・ない」

「サードインパクトは我々人類の望みだ」

「そんな訳ないじゃないか！」

扉の前にはシンジが立っていた。

「あなた達は僕の恋人を殺した。だからあなた達を許さない。でもマナは僕があなた達を殺したらきつと悲しむ。だからあなた達は死ぬまで牢に入ってもらいます」

「くっ・・・」

「ゼーレ」の面々は牢に連行された。

「シンジはこれからどうするの？」

ユイがシンジに訪ねる。

「一緒にいたい人がまたできたから」

「そう。大切にしなさい」

「うん」

そうしてシンジは駆け出した。

「私達はこれからも彼らを見守らなくてはいけないわね」

「それが私たちの唯一の罪償いだな・・・」

それから六年後・・・

「加持君、準備できた!？」

「大丈夫さ・・・。じゃ、いくか」

加持とミサトが飛び出した家の標識にはこう書いてあった。

「加持リョウジ、加持ミサト」

ミサトと加持は結婚をしていた。他にもマコトとマヤも結婚していた。もちろん、トウジとヒカリ、アスカとカヲルも例外ではない。そして今日は・・・

「では新郎夫婦のご入場です。拍手でお迎えください」

拍手が鳴り響く中、教会に入ってきたのはシンジとレイだった。そう彼らもまた一つ屋根の下で暮らすことになったのだ。結婚式が終わり・・・

「みんな久しぶりね。元気にしてた？」

ミサトが言う。

「あつたり前じゃない。ピンピンしてるわよ」

「そいつは結構」

「みんな幸せそうで何よりだね。笑顔がまぶしいよ」

カヲルが言う。

「幸せは歩いてこない。だから歩いてゆくんだね、てか？」

「そうね、その通りよ」

「みんなお楽しみのところ悪いけど僕とレイ、行くとこあるからじゃね」

そういつてシンジとレイはみんなと別れた。

数時間後・・・

シンジとレイはマナの墓の前にいた。レイは花を添える。

「マナ、僕達は結婚したんだ。今日はその報告」

「マナ、私あなたのぶんまで頑張るから、見守っててね」

「結婚しようかどうか迷ったんだ。でもレイならマナも許してくれるよね」

シンジはそう言った。

「うん。許してあげる。だから私のお願い、叶えてね」

シンジはマナの声が聞こえた気がして空を見上げる。そして微笑んだ。

「うん。絶対かなえるよ」

そしてシンジは袋からマフラーをとってお墓にかける。

「僕の最後のプレゼント。かけておくから。また・・・来るよ」

そしてシンジとレイは手をつないでその場を去った。

その後、未永く彼らは幸せに過ごした・・・

THE END

最終話 幸せのカタチ（後書き）

今まで読んでくれてありがとうございました。文がへたくそなくせに内容までゴツチャゴチャで読者の方々には迷惑をかけたとございます。それと感想をくれた方々、大変励ましになりました。ありがとうございます。これからもエヴァシリーズを書き続けたいと思います。続編とかいいかなあと密かに思っています。学園ものは苦手なのですがトライしてみたいと思います。今までご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222f/>

ANOTHER world

2010年10月9日11時49分発行